子どもたちに聞かせたい創作童話 第45集

鹿児島市
鹿児島市教育委員会 編
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

子どもたちに
聞かせたい創作童話
第45集

鹿　児　島　市
鹿児島市教育委員会　編
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

刊行のことば

鹿児島市と鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団では、「子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたい」という願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集してまいりました。

四十五回目を迎えた今回は、県内はもとより国内三十四の都道府県から、第一部、第二部合わせて一四一点もの応募があり、十代から八十代の方まで幅広い年齢層の方から、作品をお寄せいただきました。

「子どもたちに聞かせたい創作童話　第45集」では、ご応募いただいた作品の中から、特選、入選に選ばれた七作品をご紹介いたします。身近な日常を描いたものからファンタジーなものを取り扱った作品は、どれも子どもたちの夢をはぐくみたいという思いの込められたものになっております。

この作品集が、保育園や幼稚園、小学校等の教育現場のほか、図書館や公民館等のコミュニティにおいて、本の読み聞かせ等の読書推進活動に活用されますことを期待します。

また、市民の皆様が文芸活動の一環としてこの創作童話集を活用され、今後、未来を担う子どもたちの豊かな感性や優しい心をはぐくむ優れた作品を発表されますことを願っております。

終わりに、全国各地から応募していただいた方々をはじめ、作品を審査してくださいました五名の先生方、さし絵を描いていただいた四名の先生方、そして、この作品集の刊行にあたってご尽力いただきました関係者の方々に心より感謝申し上げます。

令和六年二月

鹿　児　島　市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

目次

刊行のことば……1
「第45回　子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品……4
第一部　特選「なないろキュウリのひみつ」……あいば　みか……5
第一部　入選「イタイのイタイのたべちゃうぞ」……鷲尾千恵……21
第一部　入選「だましたぬきの親切ごっこ」……さいだ・としひろ……37
第二部　特選「手紙の好きなおばあさん」……末永志穂……53

第二部　入選「ヘアゴムの魔法」……外　薗　淳……74
第二部　入選「さるいわ」……千　雲　さ　や……94
第二部　入選「ユキメガネ」……岬　と　う　こ……112
総評……134
入賞作品の選評……136
「第45回　子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項……141
応募状況……142

「第45回　子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品

〈第一部〉保育園児、幼稚園児、小学校低学年を対象にした作品

特選	なないろキュウリのひみつ	あいば　みか	福岡県
入選	イタイのイタイのたべちゃうぞ	鷲尾　千恵	大阪府
入選	だましたぬきの親切ごっこ	さいだ・としひろ	三重県
佳作	ドキドキ天気よほう	斉藤　輝昭	北海道
佳作	子ダヌキと西風	阿部　忠彦	兵庫県
佳作	階段が家出した	秋野　三歩	鹿児島県

〈第二部〉小学校中・高学年を対象にした作品

特選	手紙の好きなおばあさん	末永　志穂	山口県
入選	ヘアゴムの魔法	外薗　淳	鹿児島県
入選	さるいわ	千雲　さや	長崎県
入選	ユキメガネ	岬　とうこ	長崎県
佳作	白いタンポポ	いっき	京都府

第一部

なないろキュウリのひみつ

あいば　みか

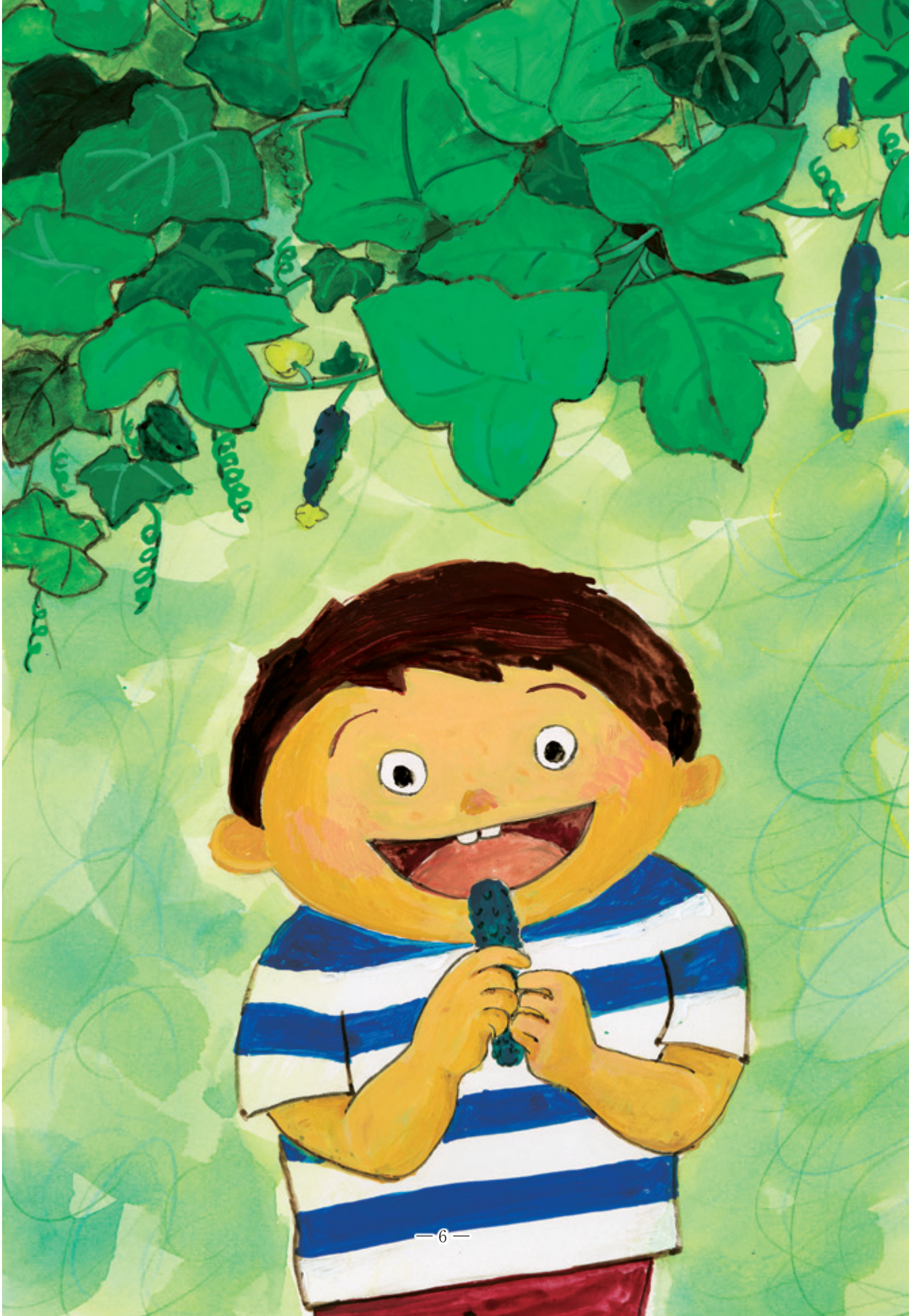
ぼくの小学校では、二年生が花だんでキュウリを育てている。みんなは水やりをしながら、大きくなるのを楽しみにしているけど、ぼくはそうじゃない。だってキュウリが大のにがてだから。

みどり色がこいところも、チクチクしているところも、外がわがにがいのもぜんぶ好きじゃない。

なのに、担任のなるみ先生ったら、「今年はたくさん実ったから、ひとり一本ずつ食べましょう」なんてことを言いだした。

なるみ先生は収穫したばかりのキュウリを「ゆうたくんどうぞ」ってわたしてくる。

ずっしりしているし、目をつぶりたくなるぐらい大きい。ほんとは小さい方にかえてほしいけど、そんなことはずかしくて言えないよ。



「先生ね、『スペシャルソース』を作ってきたの。マヨネーズにいろんなスパイスが入っているから、キュウリにつけて食べてね」

タッパーにたっぷり入ったスペシャルソースは、白のなかにいろんな色のツブツブが見える。

「そうだ、みんなでおいしく食べられるように、歌を考えてきたの。『キュッキュッキュウリ、スペシャルソースをつけてみて。カッパになっちゃううまさだよ』」

先生が歌いながら、へんてこなダンスをはじめたので、みんな楽しくなって、いっせいに食べ始めた。

ぼくもかくごを決めて、スペシャルソースをつけてパクリ。

あれ？　おいしい！

あっという間に一本食べられちゃった。

片づけをして教室に戻ろうとしたとき、ぼくは「あれっ」と思った。なんだかみんなの顔がみどりっぽい？　目をこすってもう一度よく見てみる。

あれれ？　顔だけじゃない。うでも足もみどりだし、みんなのあたまに、お皿が乗って

いる！　ぼくはドキドキしながら、自分のあたまに手をやってみた。何かある。
そのとき、なるみ先生が大きな声を出した。
「ちょっと、みんなカッパになってる」
そんなことを言ってる先生も、あたまにはみんなよりちょっと大きなお皿が乗っている。
ぼくが「先生だって、カッパだよ」って教えてあげると、先生は「うそ」とつぶやいて、窓に顔をうつした。
「ええ？　どうなってるの」
みんなはあたまのお皿を太鼓みたいに手の平でたたきながら、「カッパ」「カッパ」とはしゃぎはじめた。
「先生、泳ぎたい」
「川に行きたい」
みんなの声に、ぼくもなぜか水に入りたい気分になってきた。泳げないのに。
「どうしよう。先生も泳ぎたくなってきたわ。これから中休みだから、ちょっとだけ川に行ってみようか」
中休みのチャイムがなる前に、みんなでこっそり学校をぬけ出して、学校のそばを流れ

る川に向かった。
川に着いたらあらふしぎ。ふだんは川あそびなんかしないのに、みんなぽんぽん飛び込むし、ぼくもなぜか泳いじゃってる！　そしてびっくり。水の中なのに息ができる。
「気持ちいい」
「おもしろーい」
ぼくは友だちと手をつないで、でんぐり返りしたり、追いかけっこしたり。
みんなはもっともっと泳ぎたいって、先生を取り囲んだ。
「みんな泳ぐのがじょうずね。それなら、ちょっと先の方までいってみようか」
先生を先頭に、みんなは川の中をすーいすいすい泳いでいった。しばらくいくと、目の前にきらきら光るみどりの景色が広がった。
「先生、森がある」
「これは『藻』かしら。お日さまにてらされてきれいねえ」
ぼくは体をくねくねさせながら、藻のあいだを泳いでいった。
「川の中なのに森があるなんてすごいなあ」
みどりの森をぬけると、なんと、学校みたいなたてものが見えてきた。

泳ぎながら近づいていくと、チャイムが鳴った。そして、まどからいっせいに出てきたのは、本物のカッパの子どもたち！

カッパたちは、校庭の畑から、色とりどりの何かを取って、おいしそうに食べている。よく見ると、赤やオレンジ、きいろ、むらさき、ピンク、青、みどりの、ないろのキュウリだ。

白いひげをはやしたおじいさんカッパがやってきて、なるみ先生に話しかけた。

「ここは『カッパ森小学校』じゃ。私は校長じゃが、はて、君たちはどこからきたんじゃ」

「私たち、地上の小学校から来ました。おいしいキュウリを食べたら、カッパになってしまって」

「それはゆかいじゃ。ここでは、**ないろのキュウリ**を栽培しておってな、お菓子みたいな味がする上に、ひみつの力を持っておる。いっぱい食べていきなさい」

「やったあ」

みんなはよろこんで畑へ泳いでいった。カッパの子どもたちに教えてもらいながら、ないろのキュウリをむしゃむしゃ食べていく。

「おいしそうだなあ」

ぼくがどれにしようか迷っていると、カッパの女の子が話しかけてきた。あたまのお皿に黄色い花かざりをつけている。

「わたしが好きなのはピンクのキュウリなの。甘くて、しあわせな気分になるのよ」

女の子はそう言うと、ピンクのキュウリを取ってわたしてくれた。

一口食べてみると、今まで食べたどんなおかしよりずっと甘くて、とろけるような味。

「わたしはリバ、よろしくね」

「ぼくはゆうた」

リバとあくしゅすると、あたまがぽーっとしてしあわせな気分になってきた。

これがピンクのキュウリの力なのかな。

「カッパの学校ってどんなことするの？」

「わたしたちはね、授業で泳ぎかたとか、キュウリの育てかたを習うんだよ」

「へえ、こんなにおいしいキュウリが食べられるなんていいなあ」

「今は休み時間。たくさん食べて遊ぶの。ゆうたは休み時間どんなことするの？」

「えっと、おにごっこしたり、ブランコで遊んだりする」

「ブランコってなあに？」

「いすみたいなものに座ってこぐと、空をとんでるみたいになるんだよ」
「おもしろそう！　そうだ、わたしたちの遊びも教えてあげる」
リバが「こっちだよ」と泳ぎだしたので、後についていった。
校舎前の広場では、カッパの子供たちが円になって、「がんばれー」と声をかけている。
円のまん中では、二匹のカッパが思いきりこうらをぶつけ合っていた。
「けんかしているの？」
「これはね、『こうらずもう』っていうの」
「すもうなんだ！　でも、あんなに強くぶつけて、いたくないの？」
「だいじょうぶ。こうらを強くするキュウリがあるの」
リバはもう一度畑に行くと、今度は赤いキュウリを取ってきてくれた。
「これ、食べてみて」
ひとくち食べてみる。さっきとは全然ちがう味。リンゴみたいに甘ずっぱくておいしい。一本食べ終わるころ、背中のあたりがなんだかもぞもぞしてきた。
なんだろう。
背中を見ると、スイカを半分に割ったみたいな、みどりの丸いものがくっついている！

「ちゃんとこうらができたね。毎日食べたら、もっとじょうぶになるんだよ」
リバはぼくの背中のこうらをポンとたたいた。なんかへんな気分。
そのとき、カッパ校長の声がスピーカーから聞こえてきた。
「人間の子供たち、なないろキュウリのおかげで立派なカッパになってきましたね。今日から、君たちはカッパ森小学校の仲間です」
どういうこと？
見わたしてみると、校庭で遊んでいる友だちに黄色いくちばしができていたり、お皿がつやつやで立派になっていたり、手足に水かきができて、ほとんどカッパになっちゃっている子もいる。なるみ先生が泣きそうなかおで近づいてきた。
「ゆうたくん大変、みんなどんどんカッパになっていくの。どうしよう」
そんな、ぼくたち本物のカッパになっちゃうの？
ぼくも泣きそうになってると、リバが「こっちにきて」と、ぼくの手をつかんで、川底へ向かって泳ぎだした。
しばらくいくと、どっしりとした岩が見えてきた。岩にはこけが生えていて、何やら文字がほってある。

【　なないろキュウリの力　】

赤はこうらをじょうぶにする
オレンジはあたまのお皿によし
きいろはくちばしを強くする
むらさきは水かきをなおす
ピンクはこころをあたためる
青はおよぎをうまくする
みどりはカッパの能力を引きだす
なないろを同時に食べれば願いかなう

「なないろきゅうりの力？　すごい」
ぼくはいそいでなるみ先生のところへ泳いでいった。
「先生、なないろのキュウリを同時に食べたら、願いがかなうんだって」
「本当？　さっそくやってみましょう」
ぼくは先生と一緒に、大きな声で呼びかけた。
「なるみ先生のクラスのみんな、いろんな色のキュウリを取って、集まってくださーい」

本物のカッパとほとんど見分けがつかなくなったみんなが、色とりどりのキュウリをつかんで集まってきた。

赤、オレンジ、きいろ、むらさき、ピンク、青、みどり、うん、全部そろってる。

ぼくがみんなに教えなくちゃ、みんなを助けるんだ！　大きく息をすうと、勇気を出して声を張り上げた。

「みんな聞いて。キュウリを全員で同時に食べたら、人間にもどりたいってお願いするんだ。いくよせーの」

みんなはいっせいにないろのキュウリにかぶりついた。

ガブリ

何事も起こらない。どうしよう。そうだ。

「みんなで手をつないでお願いしよう」

ぼくが呼びかけると、みんなは手をつないで、ありったけの声でさけんだ。

「人間にもどれますように」

みんなの声がひとつになったとき、水の中にないろの光のうずがあらわれた。うずはものすごいはやさでまわって、みんなをあっという間にのみこんでいった。

気がつくと、河原にたおれていた。手も足もみどりじゃない。あたまにお皿は乗ってないし、背中にこうらもない。服もぬれていない。
人間にもどったのかな。
あたりを見ると、みんなも先生も元どおり。カッパはひとりもいない。
よかった。助かったんだ。
先生が立ちあがって、心配そうに見わたした。
「みんなだいじょうぶ？　ああ、よかった。いそいで学校にもどりましょう」
ぼくは立ちあがって、みんなのあとについていこうとした。
「ゆうた」
だれかの声に振りかえると、見たことのない女の子が立っていた。髪に黄色い花かざりを付けている。もしかして。
「わたしよ、リバ」
やっぱり。心ぞうがドキドキ早くなる。
「わたし、みんなといっしょにキュウリを食べて、『人間になってみたい』ってお願いし

たの」

リバはうれしそうに、ぼくのとなりを歩きはじめた。ほんとに人間の女の子みたい。学校につくと、中休みだったので、そのまま校庭で遊ぶことになった。

「なにあれ」

リバがブランコに向かって走っていく。ぼくが乗り方を教えると、リバはふわりとブランコのいすに座って、足を曲げたり伸ばしたり。みるみるうちに高く上がっていった。

「わあ、おもしろい」

口を大きく開けてわらうリバは、どこから見てもカッパには見えなかった。

「ああ、いっぱい遊んだら、おなかがすいちゃった」

ぼくは花だんから、一番大きなキュウリを取ってリバにわたしてあげた。リバがかぶりついて「おいしい」と言うと、あたまにポンッとお皿があらわれた。

みどりはカッパの能力を引きだす

ぼくは古い岩の文字を思い出した。

「ゆうた、なんだかわたし、急に泳ぎたくなっちゃった。きっとまた、あの力をつかって、遊びに来るね。バイバイ」

リバはそう言うと、ブランコの横にあるすべり台を下から一気にかけ上がって、ピョーンとへいを乗りこえて見えなくなった。

リバはあの力をつかってのところだけ、ふたりのひみつみたいに、小さな声でいった。

だから今日のことは、ぼくもないしょにしておくって決めたんだ。

イタイのイタイのたべちゃうぞ

鷲尾（わしお）　千恵（ちえ）

「ママ、ただいまぁっー」

ダダダダーッ！

ぼくは、大（おお）いそぎでくつをぬぐと、リビングにまっしぐら。だって、早（はや）くおもちゃであそびたいんだもん。

「おかえりっー。ああっ、レン、はしっちゃだめぇー」

ママの大（おお）きなこえ。でもぼくはとまれない。

ドンガラ・ガッチャン！

「うわぁー！」

ぼくのおでことおもちゃばこが、ごっつんこ。あたまのうえから、おもちゃがいっぱいふってきた。ぼくのおでこには、ぷっくり大（おお）きなたんこぶ。

「うわぁーん、イタイよう……」
「だから、はしっちゃダメ、っていったのに」
「うわぁーん、うわぁーん」
「ああ、いたかったねえ。よしよし」
ママはぼくをひざにのせて、おでこのたんこぶに、「イタイのイタイの、とんでいけ〜」をしてくれる。
「うぇーん、イタイの、とんでなんかいかないよう〜、イタイよう〜」
「レンったら、もうすぐ五さいなのにねえ」
いつまでもないているぼくを見て、ママは、ちょっとこまったかおをしている。
ゴトゴト。
そのとき、おくのへやのとがあいて、じいじがのっそりとやってきた。
「どれどれ、よし。わしにまかせとけ」
じいじは、ぼくのおでこにしばらく手をあてると、なにかをぎゅっとつかんだ。
「イタイのイタイの、じいじがたべちゃうぞ」
じいじは、ちょっとこわいこえでいいながら、つかんだものをパクっと口の中に入れた。

ほっぺたが、ぷうっとふうせんみたいにふくらんだ。口からあふれ出てきそうだ。じいじは、こぼれないようにぎゅっと口をむすんで、目とはなのあなを大きくひろげると、そのままごっくんとのみこんだ

「おう！　よし、これでもうだいじょうぶだ。イタイイタイ虫は、じいじがたべてやったぞ」

ぼくは、じいじのへんてこりんなかおに、すいよせられていた。

「あれっ！　イタイのなおってる」

「はっ、はっ、そうじゃろ、そうじゃろ」

じいじは、とくいそうにわらっている。

つぎの日、ぼくはじいじとこうえんにいった。すべりだいであそんでいると、みーちゃんとたーくんがやってきた。

「レン、すべりだいおにごっこ、やろう」

じゃんけんでまけて、ぼくはおにになった。

じいじはベンチにすわって、にこにこみている。

たーくんもみーちゃんもにげるのがはやい。すべりだいの上にいるとおもってのぼると、しゅーっとおりてしまう。ふたりともなかなかつかまらない。ぼくは、はやくのぼったり、おりたりがちょっとにがてだ。

大いそぎでおりようとしたとき、からだがゆれて、あたまからしゅーっとすべりおちた。

うわぁーん！

おでこと、はなのあたまをすりむいた。

「レンくん、だいじょうぶ？」

みーちゃんとたーくんがかけよってきた。

「イタイよう。イタイよう」

「あっ、おでこから、ちが出てる」

みーちゃんがびっくりしていうので、ますますいたくなる。

うわぁーん、うわぁーん。

ぼくは、大きなこえでなきさけぶ。

「どれどれ、レンのイタイイタイ虫、じいじがたべてやろう」

じいじは、ベンチからのっそり立ち上がって、やってくると、ぼくのおでこと、はなに

手をあてて、しばらく目をつぶった。
「イタイのイタイの、じいじがたべちゃうぞ」
こわいこえでそういいながら、じいじは、手のひらでぎゅっとなにかをつかむと、それをパクっと口の中に入れた。
ほっぺはパンパン、目とはなのあなが、大きくまんまるにひろがった。
「ウフッ！」
そのかおを見ていたみーちゃんが、おもわずふきだした。
「アハハハ。へんてこりんなかお」
たーくんもわらいだした。
じいじは、そのままごっくんと大きくのどをうごかして、のみこんだ。
「おう！　うまかったぞ」
「あれっ、なおってる」
じいじのマンガみたいなかおをみているうちに、ぼくのイタイイタイ虫は、どっかへいってしまった。
「はっ、はっ、そうじゃろ、そうじゃろ」

じいじは、とくいそうに大きなこえでわらった。
そうやって、いつもぼくのなきごえがきこえると、じいじがやってきて、ぼくのイタイイタイ虫をたべてくれた。さかみちでころんで、なきながらかえったときも。みーちゃんとごっつんこして、大なきをしたときも。

ある日のこと。
ようちえんバスが、おむかえのこうえんについたのに、ぼくのママがいない。
「あれっ、ママ、ママ、ママがいないよう」
たーくんもみーちゃんも、ママがおむかえにきているのに、ぼくのママだけがいない。
「レンくんのママ、どうしたのかしらねえ」
せんせいもしんぱいそうに、まわりをさがしている。ぼくの目に、じんわりとなみだがにじんできたとき、まがりかどからはしって出てくるねえちゃんが見えた。
「レン、おそくなってごめん」
ぼくのねえちゃんは、小学三年生。
いままでもママがおむかえにこられないときは、ねえちゃんがきてくれたことがある。

でも、そのときは、「あしたは、ママは、おむかえにいけないからね」と、まえの日におしえてくれた。きょうみたいに、いきなりママがいないなんてことはなかったのだけど。

「ねえちゃん、ママは？」

「ママは、ごようができて、こられないの。だから、きょうは、ねえちゃんとかえろ」

ねえちゃんが手をつないでくれた。ねえちゃんは小学生だけどおとなみたいにしっかりしていて、かっこいい。ぼくのあこがれだ。

「あれっ？　あめ？」

ポツンとつめたいものが、かおにあたった。そらが、だんだんくらくなってきている。

「レン、あめがふってきた。いそごう」

そういうとねえちゃんは、ぼくの手をひいたまま、きゅうにはしり出した。まがりかどまではしったところで、ぼくはねえちゃんのスピードについていけず、ころんでしまった。

ひだりひざから、ちがにじんでいる。

「うわぁーん、イタイよう」

「レン、なかないの。もう少しで、いえにつくからね」

ねえちゃんがひざのちを、ティッシュでふいてくれたけど、イタイのはおさまらない。

「イタイよう。イタイよう……」
あめも、ふりだした。
なきながら、ねえちゃんに手をつないでもらって、あめにぬれながらゆっくりあるいて、なんとかいえについた。
「イタイよう〜、イタイよう〜」
おおごえでなきながら、げんかんのとびらをあける。
(あれ、おかしいな)
いつもぼくのなきごえをきくと、すぐあらわれるじいじが、きょうは出てこない。
ぼくはなきながら、おくのへやをのぞく。でも、そこに、じいじはいなかった。
「レン、ぬれたからだをふかなきゃ。おくすりもつけてあげるから、こっちにおいで」
「イヤだ、イヤだ。イタイよう! じいじ、イタイよう」
「レン、じいじもママも、いないよ」
「えっ? じいじとママはどこに行ったの?」
「びょういん。じいじがきゅうきゅうしゃで、はこばれたんだって」
ねえちゃんが、しずかにいった。

「えっ！　きゅうきゅうしゃ？　どうして？」
ぼくは、びっくりしてたずねる。
「わたしもよくしらないけど、じいじが、たおれたらしい」
「えっ？　どうして？」
「きゅうに、おなかがイタくなったみたい」
「えっ？　おなか？」
「う～ん、くわしいことはわからない。とにかくママがかえってくるまで、ふたりでまっていなさいって」
（えっ、じいじがおなかがいたいって？　どうしたんだろう？　もしかして……、もしかしてぼくのイタイイタイ虫をたべたから、びょうきになっちゃったの？　もし、……、もしも、そうだったらどうしよう……）
ぼくのむねは、ドックン、ドックンと、からだからとびだしそうに、大きなおとであばれはじめた。
（そういえば、いつもイタイイタイ虫をのみこむとき、じいじは、くるしそうだった。ぼくのイタイイタイ虫を、いっぱいたべたせいで、じいじは、おなかがいたくなっちゃった

んだ。きっとそうだ）

ぼくは、あしがいたかったことなんて、すっかりわすれていた。

そのあと、おやつをふたりでたべたけど、まだママたちはかえってこない。ねえちゃんとふたりでテレビを見(み)たけど、なんかきょうのテレビは、つまらなかった。

よるになって、ようやくママだけがかえってきた。

「ママ、じいじは？」

まちかまえていたねえちゃんが、きく。

「うん、おなかのしゅじゅつをすることになって、しばらくにゅういんするけど、だいじょうぶよ」

「しゅじゅつって？」

ねえちゃんがびっくりして、ママにきく。

「おなかをきって、わるい虫(むし)をとりだすのよ」

「ふうん」

ねえちゃんも、しんぱいそうにしている。

（わるい虫？　ぼくのイタイイタイ虫だ。やっぱりぼくのせいだ。どうしよう）
ぼくは、しんぱいでたまらない。でも、うまくいえない。
「ぼく、じいじに、……あいたいよう」
「うん、そうね。いまは、あえないけど、しゅじゅつがおわったら、いっしょにびょういんにいこうね」

それからいっしゅうかんほどたった日よう日、ママは、ぼくとねえちゃんをびょういんにつれて行ってくれた。
びょういんにおみまいにいくのは、はじめてだ。びょういんは、白くてかたくて、なんかへんなにおいがして、ちょっとこわい。
エレベーターで三がいにあがる。ながいろうかがつづいている。じいじのへやは、いちばんおくらしい。ろうかをあるくと、コツン、コツンとママのくつおとがひびく。まじょが出てきそうで、なんだかきみがわるい。
ママがノックして、じいじのへやのとびらをあけると、カーテンがかかっていた。
「こんにちは」

ママが、カーテンをそっとあけると、白(しろ)いかおをしたじいじが、ベッドにねていた。
じいじは、ぼくたちにきがつくと、すこしよわよわしくだけど、いつものようにわらった。
「じいじ、おなか、イタイの？」
ねえちゃんが、しんぱいそうにきく。
「少(すこ)しな。でも、もうだいじょうぶじゃよ」
ぼくは、じっとじいじのおなかとかおを見(み)つめる。なかなかことばがでてこない。
「じいじ、……」
「おう、レンもきてくれたのか、ありがとな」
「じいじ、……。じいじ、……、ごめんね」
ぼくはちいさな、ちいさなこえでつぶやく。
「ん？　レン、どうしたんじゃ？」
「じいじ、……。じいじは、ぼくのせいで、おなかがいたくなっちゃったんだよね」
「ん？　なんで、レンのせいなんじゃ？」
「じいじは、ぼくのイタイイタイ虫(むし)、いっぱいたべたから、おなかのびょうきになっ

ちゃったんでしょ。ごめんね……」

ぼくは、なみだいっぱいの目で、やっと、ことばをはきだす。

「うん？　ハハハハハ……、ひっ、イタっ！」

じいじは、大きなこえでわらいだしたかとおもうと、おもわずイタそうにかおをしかめた。じいじのひきつったかおを見ると、ぼくはますますしんぱいになる。

「レン、そんなわけないぞ。レンのイタイイタイ虫は、じいじがちゃんとたいじしてやったから、だいじょうぶじゃ。しんぱいないぞ」

「でも、じいじ、イタそう……」

「これはな、しゅじゅつのきず口が、わらうといたむのじゃよ。こんなもんは、すぐになおるさ」

「ほんと？　ぼくのせいじゃないの？」

「あたりまえじゃ。それよりわらわせるな。わらうといたいんじゃよ」

じいじはそういうと、にっこりわらいながらぼくのあたまに手をあてて、やさしくなでてくれた。

じいじの手は、大きくてあったかい。

ぼくは、大きくいきをすうと、じいじのおなかにりょう手をのせた。
「じいじのイタイイタイ虫、ぼくがたべちゃうぞ」
ぼくは、からだじゅうに力を入れて、いつもじいじがするように、イタイイタイ虫を手でつかんで口の中に入れた。むねがドキドキしたけれど、そのままごっくんとのみこんだ。むねがすうっとした。
「どう、じいじ、なおった？」
「あれっ、ほんとだ。もういたくないぞ」
じいじが、びっくりしたかおで、にっこりわらった。ママとねえちゃんも、にこにこしている。

「じいじ、おうちにかえってきたら、これからはぼくが、じいじのイタイイタイ虫をたべてあげるからね」
「おうっ、それはうれしいのう」
「じいじ、よかったね。はやくかえってきてね」
ねえちゃんが、うれしそうにいう。
ママも、にっこりわらっている。

だましたぬきの親切ごっこ

さいだ・としひろ

むかし、ある山の森の中に、一匹のたぬきがすんでおりました。このたぬきは人間をだますのがとくいで、村人たちをだましてはよろこんでおりました。

夏のある日、三平がくやしそうに、五助と与七に話します。

「あのたぬきのやつにひどい目にあったわ。おれが畑のそばでにぎりめしを食べようとしていたら、五助がやってきて、『頭の上に虫がついとるぞ』っていうんだ。おれが、『ええっ』とびっくりしていると、『とってやる。目をつぶっておれ』といって、虫をつかまえるふりをして、にぎりめしを二つとってにげだしたんだ。おいかけると、五助がたぬきのすがたになりおった」

五助も、こぼしました。

「おらは、井戸の中ですいかをひやしておいたんじゃ。そしたら、与七がやってきて『こんなあつい日は、すいかをひやしとるじゃろう。そろそろひえたころか見てきてやる』といったんだが、もどってきやしない。しかたがないから、外に出て、井戸からすいかを引き上げたら、すいかのかわりにたぬきがぶらさがっていて、『なかなかおいしかったわい』というんじゃ。はらがたって、はらがたって、ぶんなぐろうとしたけど、にげられてしまった。あいつは与七にばけていたんだ」

与七も話にくわわりました。

「わしがふろをわかして、さあ、はいろう、と思ったら、三平がやってきて『お前んちの畑、だいじょうぶか。見知らぬ人間がすいかをながめとった。すいかどろぼうが多いでの』というんじゃ。いそいで見に行ったら、すいかはだいじょうぶじゃった。あんしんしてもどってきたら、たぬきがふろにはいっとる。「こらー!」とおこったら、「ここのふろのけしきはつまらん。木がはえてない裏山しか見えんじゃないか」とぬかしおった。くやしくて、つかまえようとしたが、むりじゃった。あの三平もたぬきじゃった」

三人はためいきをつきました。

「あのたぬきにだまされないようにするための、何かいい手はないかのう」

三平がそういうと、五助がひざをたたきました。
「そうじゃ。あのたぬきは、だれかにばけて、おらたちをだますんだ。だから、合図をきめておけばいい」
与七がうなずきました。
「なーるほど。そいつはいい。じゃ、どんな合図がいいかのう」
三平がにたりと笑いました。
「その日はじめて会ったときは、自分の鼻をつまむんじゃ。相手が鼻をつままぬときは、たぬきがばけているということじゃ」
五助も与七もさんせいしました。みんなで手分けして村じゅうにこの合図をつたえに行きました。

次の日、たぬきは与七にばけて、畑のそばでおにぎりを食べている三平に近づきました。
「三平、たいへんだ。お前のほっぺたにハチが止まっとる。目をつぶっておれ。たいじしてやる」
三平は鼻をつまみました。与七にばけたたぬきは気にとめませんでした。

「たぬきめ、おれがその手にのるものか」
三平はおにぎりをしっかりかかえて、ぜったいにたぬきにとられないようにして食べています。これでは、あきらめるよりほかにしかたがありません。
たぬきは今度は三平にばけて、五助のところに行きました。
「きょうもあついのう。すいかを井戸でひやしてやろうか？」
五助は鼻をつまみました。しかし、たぬきがばけた三平は何もしませんでした。
「お前はたぬきだな。おらはお前にはもうだまされんぞ」といって、見むきもしません。
たぬきはあきらめて帰りました。
たぬきはつぎに、五助にばけて、与七のところへ行きました。
「与七、つかれただろ。ふろをたいてやるからな」
与七が鼻をつまんでも、たぬきがばけた五助はにたにた笑っているだけでした。
「このたぬきのやろう、五助によくにとるが、だまされんぞ」
そういって与七は相手にしません。たぬきはすごすごと森へ帰って行きました。
たぬきは、森にもどると、ためいきをつきました。

「やれやれ。うまくばけたはずなのに、どうして見やぶられてしまうんだろう。きのうまでは、あんなにかんたんにだませたのに。つまらんのう。たのしみがなくなった。どうしたら、だませるんかのう」

そのとき強い風がふきました。高い松の木の上から、大きな声がとどろきました。

「ワッハッハ。たぬき、わたしが教えてやろう」

たぬきが上を見上げると、松の木の上から、天狗がつばさをはばたかせておりてきました。せが高く、顔がまっ赤で、高い鼻をしています。右手には羽でできたうちわをもち、足には高げたをはいています。大きな黒目がにらんでいます。

「て、天狗……」

「人をだますには、まず相手から信用されねばならぬ。信用せぬ相手にだまされる人間はいない」

たぬきはなるほどと思いました。

「じゃあ、信用されるにはどうすりゃいいんですか？」

「だれかにばけるんじゃなく、たぬきのままで、相手のためになることをするのじゃ。これを『だましたぬきの親切ごっこ』という」

「はい。むつかしいけど、やってみます」

こうして、天狗から人をだます方法を教えてもらったたぬきは、親切ごっこにはげみます。

まず、三平のところに行きました。

「三平どん。畑しごとを手つだいましょう」

「たぬき、何をたくらんどる？　おれは、お前には手つだってもらわん。きっとだまされるからなあ」

「そんなことありませんよ。おいらを信用してください」

「帰れ、帰れ」

たぬきは今度は、五助のところへ行きました。

「五助どん、にわの草とりのお手つだいにきました」

「ふん。たぬきめ、そんなうまいことといって、おらのうちの食べものをぬすむ気だろ。だまされないぞ。帰れ」

たぬきはつぎに与七のところへ行きました。

「与七どん、きょうからふろはおいらがわかしますよ」
「やめてくれ。わしは、お前の親切には裏があることくらいわかっとる。たぬきは早く森へ帰れ」
たぬきはがっかりしてもどりました。
どうしたら信用してもらえるんだろう？
だいたい、おいらはみんなを苦しめたくてだますんじゃない。おいらはひとりぼっちでさびしいから遊んでほしいんだ。だけど、そのためには、まずみんなから信用されないと。そのためには、天狗が教えてくれた「親切ごっこ」をやるしかない。
たぬきは、次の日も、また次の日も、みんなのところに行って、親切をしようとしては、ことわられる、というのをくりかえしました。
夏が終わり、秋がやってきました。そのある夜のことでした。大がたの台風が近づいていました。森の中のあなでねていたたぬきは、水がはいってきて、目をさましました。
このあなに水がはいったのははじめてだ。おまけに、外からヒューヒューという風のおそろしい音が聞こえる。こんかいの嵐はただごとじゃない。

そういえば、与七どんの家は斜面の下じゃった。こんな大雨と大風だと、木がはえていないじめんはもろい。ひょっとして山くずれがおきるんじゃないか……。

たぬきはそう思うと、心配でたまらなくなりました。

たぬきは走りました。与七どんの家につきました。

「与七どん！　ここはあぶないぞ！　早く家の外に出ろ！」

と戸をどんどんとたたきました。与七はおきてきません。

おいらの小さな声をいくらはりあげても、この嵐のせいで聞こえないんだ。どうしよう。そうだ！　五助どんの力をかりよう。

五助どんの家に走りました。

「五助どん、おきてくれ」

五助は目をこすりながらおきてきて、戸をあけました。

「たぬき、お前だったのか。こんな夜中にまたおらをだまそうとするのか」

五助は戸をしめようとしました。

たぬきは戸をりょう手でとめて、頭を下げました。

「ちがうんじゃ。この大雨で与七どんの家が山くずれにあうかもしれん。早く外に出んと

いのちがあぶないんじゃが、与七どんは戸をたたいてもおきないんじゃ」
たぬきのしんけんな口ぶりに、五助は顔つきがかわりました。
「そうか。よく知らせてくれた。おらはすぐ与七どんの家に行く。お前は三平どんの家に行って、おうえんをたのんでくれ」
五助は与七の家に走り、たぬきは三平の家に走りました。
与七どんの家についた五助は、戸をひっしにたたきます。
「与七どん、おきろ！　おきるんだ！」
五助がけんめいにさけび、全力で戸をたたいても、へんじがありません。
そこへ、三平とたぬきがやってきました。
五助が思いつめたようにいいました。
「こうなればしかたがない。裏口へ行って、戸をこわしてでもはいろう」
三人で裏口に行きました。やっぱりかぎがかかっていました。五助はオノを見つけると、りょう手でオノをにぎりしめて、戸めがけてふりおろしました。
バリッ
大きな音がして戸がこわれました。五助が何度もオノをふりまわし、やっと中にはいれ

ました。
「与七どん！」とどなりながら、三人は与七をさがしました。ねていた与七と女房がやっと目をさましました。
「何じゃ、お前たち、そんな大声を出して」
「与七どん、山くずれがおきるかもしれん。にげるんだ！　いそげ！」
半分ねぼけている与七と女房を、三人は力ずくで外に出しました。
そのときです。ゴーッという音がして、裏山の斜面の土がながれおちてきました。
「にげろ！」
みんなひっしに走りました。しばらくして、ふりかえって見ると、与七の家は半分、土にうもれておりました。
「ああ、わしの家が……」
なげく与七を、五助がなぐさめます。
「いのちが助かっただけでも、ありがたいじゃないか。家のしゅうりはおらたちが手つだうよ」
三平が与七のかたをたたきました。

「実は、お前を助けたのは、おれたちじゃないんだ」
与七はわけがわからないという顔をしています。
「それじゃあ、いったいだれが？」
五助と三平はゆびをさしました。その先にはたぬきがいました。
五助はうなずきました。
「たぬきがお前をおこそうと戸をたたいてもおきなかったそうじゃ。それでおらたちの家に来て助けてくれ、というんじゃ。はじめは、そんなばかな、と思ったんじゃが、この嵐はこれまでの嵐とちがう、ひょっとして山くずれがおきるかもしれん、そう思ってお前たちを外につれ出したんじゃ。みーんな、たぬきのおかげじゃ」
与七はたぬきに近より、頭を下げました。
「すまん。お前がいろいろ手つだおうとしてくれたのに、わしは、またお前にだまされると思いこんで、つめたくした。ゆるしてくれ」
たぬきはそんなにいわれて、はずかしいやら、くすぐったいやらで、しぜんとにが笑いをうかべました。
「へへへ」

たぬきの心があたたかくなりました。

たぬきが与七と女房をすくったといううわさが村じゅうに広まると、村人たちのたぬきを見る目がかわりました。どこに行っても、たぬきはあたたかくむかえられました。たぬきが手つだいたい、というと、村人はどんどん手つだいをたのむようになりました。

ところが、たぬきにあたらしいなやみがうまれました。

どうしよう？　だますために「親切ごっこ」をはじめたのに、みんながほんものの親切だと思いこんでいる。こんなはずじゃなかった。

おいらが何をいっても、何をしても、村人たちは信じてくれる。まるごと信じられてしまうと、だますことができないじゃないか。

こまった、こまった。

だましたいのに、だませない！

「だましぬきの親切」しか、できなくなっちゃった。

え？　「だましぬきの親切」だって？

どっかで聞いたな……。

わかった！

「だましたぬきの親切ごっこ」から、たぬきの「た」をぬいたら、「だましぬきの親切ごっこ」になる。

ということは、ひょっとして、おいら、天狗にだまされたんじゃないだろうか？

でも、親切をすると、みんながかんしゃしてくれる。いい気分になる。

親切って楽しいな……。

強い風がふいて、松のえだをゆらしました。

遠くから、天狗のワッハッハという笑い声が聞こえたような気がしました。

第二部

手紙の好きなおばあさん

末永　志穂

おばあさんは、手紙を書くのが好きでした。
遠くに住んでいる娘あてに。
隣町に住んでいる息子家族あてに。
仲の良い友達あてに。
少し前にばったりと再会した、おさななじみあてに。
お世話になっている、生花教室の先生あてに。
毎日いろんな人に手紙を書きます。
そして一日の終わりに、二年前に天国へ行ってしまったおじいさんあてに、手紙を書くのでした。
「近所の公園の桜の花が咲いていたので、ついついお団子を買ってしまいました。」

「今日もセミの声がうるさいです。元気いっぱいなのは、うらやましいことですね。」
「庭に紅葉の葉がたくさん落ちていました。秋の深まりを感じますね。」
「今日は雪がつもりました。寒さが身にしみます。」
小さなびんせんに、一言か二言のとても短い手紙。
毎晩それをおじいさんの仏壇にそえて、おばあさんは眠りにつくのです。

ある日、おばあさんの住む町に、強い雨がふりました。風もびゅうびゅうと強くふいています。
夜になっても、雨と風の勢いはちっともおさまりませんでした。
「今日はとてもひどい雨です。少しこわいくらい」
その日の晩も、いつものようにおじいさんに手紙を書いて、おばあさんは早めに布団に入ることにしました。
強い風が家全体をギシギシと音を立ててゆらし、大きな雨つぶがバチバチと窓をたたきます。
ちょっぴりこわくなって、おばあさんは頭からすっぽりと布団をかぶりました。

こんなとき、おじいさんがそばにいてくれたら、どれだけ心強いでしょう。
おじいさんはあまりおしゃべりをする人ではありませんでしたが、おばあさんがこわがっていたり、悩んでいたりしたときは、いつもよりそって優しく手を握ってくれていました。
握ってくれる相手のいなくなった手を、おばあさんはじっと見つめます。
「さみしいわ……」
布団の中でぽそりとつぶやいた言葉は、なんだかやけに大きく聞こえました。

どれほど時間が経ったでしょうか。
うとうとしていたおばあさんは、ふと部屋のすみの方でカサカサと紙がこすれるような音で目を覚ましました。
そっと布団から顔を出し、耳をすませてみると、その音はどうやらおじいさんの仏壇の方からしてきているようでした。
そろり、そろり。
おばあさんは静かに布団から起き上がって、ゆっくりと仏壇の方へと近付いてみます。

暗い部屋に、ぼんやりと白くて大きなものが浮かび上がってきました。

「まあ！」

おばあさんはおどろきました。

なんとその大きくて白いものは、紙ひこうきだったのです。

とても大きな紙ひこうきが、おじいさんの仏壇の前にどんと置いてあったのでした。

「一体いつの間に、だれがこんなものを……」

おばあさんは不思議に思い、紙ひこうきをあちこちしげしげと眺めます。

よくよく注意して見てみると、その紙ひこうきは、小さな紙がたくさん集まってできていました。

やがて暗さに目がなれてきた頃、ふと手元を見ると、そこには見なれた文字で「桜の花が咲いていたので」と書いてありました。

そうです。その紙ひこうきは、おばあさんがおじいさんにあてて書いた、たくさんの手紙たちでできていたのです。

「あらあらまあ、なんてこと」

もっとよく見てみようとおばあさんが身を乗り出した瞬間、紙ひこうきがふわりと浮き

上がりました。

「あらっ!?」

おばあさんは慌てて、紙ひこうきにしがみつきます。

おどろくおばあさんを乗せて、紙ひこうきはすいっと窓から飛び出し、そのままぐんぐん空高く飛んでいきました。

あっという間に住みなれた町が遠ざかっていき、代わりにきれいな星空が頭の上いっぱいに広がりました。

「まあ、すごいわ！」

ちょっぴりこわかったけれど、すいすいと風を切って夜空を飛んでいくのは、とても楽しくて良い気分です。

「ああ、いい気持ち。このまま、雲の上まで行ってみようかしら」

おばあさんの言葉が通じたかのように、紙ひこうきは大きな雲に向かってぐんぐん飛んでいきます。

そして紙ひこうきとおばあさんは、本当に雲を突き抜け、空高く舞い上がりました。

海のようにどこまでも続く広い雲の上に、満月がぽっかりと浮かんでいます。

「なんてきれいなんでしょう」
おばあさんの口から、うっとりとため息がもれます。
ふと遠くの雲の上に、小さな人影が見えました。どうやら紙ひこうきは、その人影に向かって飛んでいるようです。顔は暗くてよく見えませんでしたが、こちらに向かって大きく手をふっているのが分かりました。
「一体誰かしら。もしかしたらあの人も、お手紙のひこうきでここまで来たのかもしれないわね」
ふふっと笑いがこぼれました。
そうしている間にも、どんどん人影との距離が近くなってゆきます。
やがて紙ひこうきがその人影の前にゆっくりと着地したとき、おばあさんはハッと息をのみました。
その人影の正体は、亡くなったおじいさんだったのです。
「おじいさん！」
「やあやあ、久しぶりだねぇ」
転げるように紙ひこうきからおりたおばあさんの両手をぎゅっと握りしめて、おじいさ

んが嬉しそうに言いました。
「もう、いやだわ。あなたったら、こんなところにいたのね！」
少し怒ったように言うおばあさんに、おじいさんは「そうだよ」と答えて、にっこりと笑いかけます。
「毎日手紙ありがとう。いつも楽しみに読んでいるよ」
おじいさんの笑顔を見ていたら、急に胸がいっぱいになってきて、おばあさんの目から、ぽろりと涙がこぼれてしまいました。
「あなたも、たまにはお返事書いてくださいよ。いつも私ばっかり」
他にも話したいことがたくさんあったはずなのに、なんだか恥ずかしくて、ついつい憎まれ口をきいてしまいます。
せっかく久しぶりに会えたのに。手紙だったら、もっと素直に自分の気持ちを伝えられたのに。
「そうだよねぇ。ごめんよ、次はちゃんと返事を書くから」
「きっとですよ」
「うん、きっと」

その瞬間、おばあさんはパチっと目をさましました。
慌てて飛び起きると、そこはいつもと同じ自分の部屋でした。
ぴったりと閉めたカーテンのすき間から、太陽の光がチラチラとこぼれています。
「なんだ、夢だったの……」
おばあさんはがっくりと肩を落としました。
そして布団から起き上がろうとして、ふと手になにかを握りしめていることに気が付きました。
「なにかしら？」
手を広げてみるとそれは、おじいさんが昔おばあさんにくれたラブレターでした。
「まあ、なつかしいわ！」
大事にしまっていたのに、いつのまにかなくしてしまっていた、大切な手紙。
戸棚のすき間に入りこんでいたのが、昨日の強い風で家がゆれたひょうしに、すべり落ちて出てきたのでしょうか。それを寝ぼけて掴んでしまっていたのでしょうか。
ぱらりと手紙を開きながら、おばあさんは昔のことを思い出していました。

おじいさんとおばあさんは、同じ小学校に通っていました。
活発で、いつも外で遊んでいたおばあさんと、運動が苦手でいつも教室で本を読んでいたおじいさん。
全く共通点がないふたりだったので、滅多に話したり一緒に遊んだりすることはありませんでした。
ある日のことです。
おばあさんは、一番の友達だったヒロコちゃんとケンカをしてしまいました。
とてもひどいケンカでした。
もう、一生仲直りできないかもしれないと、幼かったおばあさんは思いました。
悲しくて悲しくて、授業が終わった後に校舎裏の花壇の前でおばあさんがくすんくすんと泣いていると、そこにおじいさんが通りかかったのです。
「どうしたの。どうして泣いているの？」
「……ヒロコちゃんとケンカしたの」
鼻をすすり上げながらおばあさんが答え、そしてぽつりぽつりと話し始めました。

昨日、学校が終わった後にヒロコちゃんと遊ぶ約束をしたこと。四時に近所の公園で約束をしたのに、遅れてしまったこと。ヒロコちゃんは四時ぴったりに公園に来たけれど、おばあさんが来なかったので、すぐに家に帰ってしまったこと。おばあさんは四時過ぎに公園に着いて、それからずっとヒロコちゃんのことを待っていたこと。次の日に学校で、おばあさんがヒロコちゃんに「昨日どうして公園に来なかったの？」と声をかけると、ヒロコちゃんが怒り出したこと。

「私、ちゃんと約束の時間通りに来たわ！来なかったのはそっちじゃない！」

そう大きな声で責められて、おばあさんもつい、

「でも、すぐお家に帰っちゃうなんてひどいよ！」

と、言い返してしまったのです。

「約束の時間に来ない方がひどいでしょ！」

「ちょっと遅れただけなんだから、待っててくれたっていいじゃない！」

そうして、ふたりともお互いに「ごめんなさい」が言えないまま、放課後になってしまったのです。

説明をしながら、おばあさんはまたぐすぐすと泣き始めてしまいました。

おじいさんはおばあさんの話を聞いて、しばらく考え込んでいましたが、やがて「ちょっと、待っててね」と言い残して、教室に帰っていってしまいました。

それから数分して、おじいさんは戻ってきました。紙切れのようなものを、大事そうに手に持って。

きょとんとしているおばあさんに、おじいさんはその紙切れを差し出しました。

「なぁにこれ、お手紙？」

「うん。僕、あんまり話すのが得意じゃないから、言いたいことを書いてきたんだ」

おばあさんは手紙を受け取り、そっと開きました。

きれいにちぎり取られたノート紙に、たくさんの字が並んでいました。

大好きなお友達とケンカしてしまって、とても悲しかったね。

はやく仲直りをして、また一緒に遊びたいよね。

でも、自分から謝るのって、すごく勇気がいることだと思う。

もしも面と向かって謝るのが難しかったら、手紙で気持ちを伝えるはどうかな。

もしかしたら、お友達の方も、はやく仲直りしたいと思ってるかもしれないよ。

そういったことが、おじいさんからの手紙には書いてありました。
読んでいるとだんだん、おばあさんは心の中があたたかくなっていくのが分かりました。
まるで、おじいさんの優しさを少し分けてもらったような気分でした。
「ありがとう。私、お手紙書いてみる。それで、ヒロコちゃんに謝るわ」
「うん、それがいいね」
おじいさんにお礼を言って家に帰り、おばあさんはすぐにヒロコちゃんに手紙を書き始めました。
なるほど確かに、手紙だと素直に「ごめんなさい」という言葉が言えました。
次の日、書いてきた手紙を渡すと、ヒロコちゃんは最初おどろいていましたが、すぐにおばあさんに返事を書いてくれました。ヒロコちゃんからの手紙にも「ごめんなさい」がきちんと書いてありました。
おじいさんの言った通り、ヒロコちゃんの方も、おばあさんに謝りたい、仲直りがしたいと思っていたようでした。

ヒロコちゃんとおばあさんは、ケンカをする前よりももっと仲良くなれた気がしました。

全部おじいさんのおかげです。

おばあさんは、おじいさんにお礼を言おうと思いました。

でも、面と向かってお礼を言うのは、なんだか恥ずかしい。

「そうだ、またお手紙を書けばいいんだわ！」

おばあさんは、おじいさんにもお礼の手紙を書くことにしました。

やはり手紙だと、思っていることや、ちょっと照れてしまうようなことも、きちんと伝えることができました。

「お手紙って素敵ね。送ってももらっても、とっても嬉しいもの」

お礼の手紙を渡すとき、おばあさんがそう言うと、おじいさんは優しく笑って頷いてくれました。

そういえばそのときからでした、おばあさんが手紙を好きになったのは。

そうです。手紙という形で誰かに思いを届ける楽しさや嬉しさを最初に教えてくれたのは、おじいさんだったのです。

おばあさんからの手紙に、おじいさんは返事をくれました。おばあさんも、またおじいさんに手紙を書きました。

ふたりは何度も手紙のやり取りを繰り返し、どんどん仲良くなりました。

好きなこと、苦手なこと、今日あったこと、嬉しかったこと。色々なことを手紙で話しました。

大きくなっても、手紙のやりとりは続きました。おじいさんの手紙は、とても丁寧で優しくて、読んでいるとぽかぽかとあたたかい気持ちになれました。

手紙だけでなく、ふたりは会っておしゃべりもたくさんしました。

何年も何年もそれが続いて、そしてふたりが大人になったときに、おじいさんがおばあさんに手紙で結婚を申し込んだのです。

「僕は、話すのがあまり得意ではないから、手紙を書いてきたんだ」

顔を真っ赤にして、ちょっぴりしわが寄った封筒をおそるおそる差し出してきたそのときのおじいさんを思い出して、おばあさんは「ふふふ」と小さく笑いました。

さて、そろそろ起きなくてはいけません。

枕元の目覚まし時計で時間を見ようとすると、横に置いていた携帯電話がピカピカと光っていることに気付きました。

寝てしまった後で、娘から電話が入っていたようです。

「もしもし、お母さん？　雨すごいけど、大丈夫？　もう寝ちゃったかな、明日私お休みだから、また電話するね。来月はまとまった休みがとれそうだから、またそっちに帰るからね」

はきはきとした声で、留守番電話が残されていました。

「まったく、あの子ったらせわしないわねぇ」

呆れながらも、おばあさんはなんだか嬉しそうです。

息子からも、同じようにおばあさんを心配するメールが届いていました。

「大雨ですが、そちらは大丈夫ですか？　明日用事があって近くに行くので、ついでにみんなで寄ります。」

「あらまあ、いやね。みんなして心配性なんだから」

昨日までのさみしい気持ちは、いつの間にかどこかへ行ってしまっていました。

起き上がってカーテンを開けると、雨はすっかりやみ、透き通るような青空が広がっていました。

「良かったわ」

おばあさんがほっと胸をなで下ろしたその瞬間、さあっと青空に大きな虹がかかりました。

「まあ！」

きっとおじいさんです。

おばあさんには分かりました。

このきれいな虹は、おじいさんからの手紙にちがいありません。

だって虹を見た瞬間、おじいさんからの手紙を読んだときと同じように、胸があたたかくなったのですから。

（お返事、ちゃんと書いてくれたのね……）

おばあさんはしばらくの間、虹をうっとりと眺めていました。

「虹のお手紙だなんて、おじいさんらしいわ。そうよね、文字だけじゃなくて、気持ちを伝える方法はたくさんあるものね」

今朝の娘からの電話と、息子からのメールのことを思い出しながら、おばあさんは呟きます。

そしてすぐに「よし」と気合を入れて腕まくりをしました。

さあ、今日も忙しい日になりそうです。

まずは、娘から電話がくる前に、こちらからかけてしまいましょう。それから、息子たちが来るなら部屋の掃除もしておかないと。

「そうそう、先週届いたヒロコちゃんからのお手紙にも、お返事を出さなくっちゃ」

そして夜にはまた、おじいさんに手紙を書かなくてはなりません。なんといっても今日は、たくさん書くことがあります。

夢で会いに来てくれたお礼、手紙がちゃんと届いていて安心したこと。

おじいさんが空からいつも見守ってくれていることが分かって嬉しかったこと。

それから、娘や息子たち、友達――離れていてもこうして自分を気にかけてくれている人たちがいることに気付けたこと。

だからもう、さみしくないということ。

書き出しはもう決まっています。

「お返事届(へんじとど)きましたよ、ありがとう」

ヘアゴムの魔法

外薗　淳

ハヤは、「物語」にとりつかれた四年生。

映画も、マンガも好きだけれど、一番好きなのはやっぱり小説でした。

だって、文章という「示されたルール」の中であれば、どんな想像をしても自由なのです。例えば「コートを着た長髪の女性」……と書いてあれば、ガウンコートもダッフルコートも着せ放題。髪色だって、金髪や銀髪、紫色や橙色にしても、誰にもとがめられたり、文句を言われたりすることはありません。

今日の下校道も、「いけないことだ……」と分かりつつも我慢できず、「指輪物語」の最終巻を読みふけりながら、フラフラ歩いていました。

「フギャァッ！」

叫び声におどろいて、とびのいたハヤ。

「ああっ！　ごめんなさい！　黒猫さん！」
どうしよう！　ネコ、ふんじゃった！
「あいたたた……おしりが……」
オロオロするハヤを見上げて、黒猫が言いました。
「痛くって歩けないよ……僕のうちまで、連れていってくれない？」
黒猫を胸に抱き、道案内されるがままに、ハヤが駆けていくと……
「えっ……ここなの？」
そこは、界隈の子どもたちには有名な、「ブルーアイズ・ガンコ・バーサマ」のお屋敷。
おそるおそる玄関を上がり、ちゃぶ台の上に黒猫を横たわらせると、奥の部屋からふすまを「バーン！」と開き、おばあちゃんが入ってきました。ギョロリとした青い目玉に、口にくわえたキセルが、迫力満点……！
おばあちゃんは、黒猫の腰を何度か指先でトントンと叩いた後、奥に戻り、ジャムのようなものが入った瓶を持ってきました。
そして指先に、そのネバネバしたものを付けると、腰の毛の間に滑り込ませて塗りつけました。どうやら薬だったようです。

次に手早くクルクルッと、包帯を巻きつけました。それがオムツみたいに見えて、ハヤは思わずクスッと、吹き出してしまいました。

黒猫が、キバをむき出しにします。

「このこむすめは……一体誰のせいで、こんなことになったと思っているの？」

「ごっ、ごめんなさ……えっ!?　ね、猫が喋ってる!?」

「今ごろ、なにを言ってるのさ。僕は魔女の使い魔だもん。人間の言葉くらい、朝飯前さ」

魔女？　……魔女って、もしかしてこの、「ブルーアイズ・ガンコ・バーサマ」が？

それからというもの、ハヤは放課後には、ネロとサンドラのところへ遊びに来るようになりました。ネロは黒猫の、サンドラは魔女のおばあちゃんの名前です。

ネロは、それはもうとってもお喋り好きで、けれども反対にサンドラは、ハヤと全然、言葉を交わしてくれませんでした。

けれども、縁側でハヤとネロが語り合っていると、いつもお盆にのせて、麦茶と栗まんじゅうを持ってきてくれるのでした。

ある夕方、ハヤが帰ろうとすると、ポツポツ……と雨が降りはじめました。

Magic

「傘を借りておゆきよ」
ネロがそう言ってくれたのですが、どうやら玄関には置いてありません。
奥へと入ったハヤが、ふすまを開けると、和室の壁に、とても大きな傘が立てかけられていました。持ち手の「J」の部分が無ければ、ビーチパラソルと間違えてしまいそうなほどです。試しに開いてみると……
「わあ、きれい！　にじいろの傘ね！」
骨八本で区切られた、それぞれの面には、赤橙黄緑青藍紫……虹の七色が張り付けてありました。残りの一面は、透明窓になっています。
ごきげんで、傘をクルクル回していると、
「こらぁっ!!」
後ろからいきなり怒鳴られ、ハヤは跳び上がりました。サンドラが、ハヤから傘を取りあげて、さっさと閉じてしまいます。
「……ごめんなさい」
固まっているハヤをジロリとにらみ、サンドラは右手に持ったキセルで、空中にツイツイッと、なにかの模様を描きました。

すると、廊下から丸イスがスーッ……と、動いてきたではありませんか！
キセルだと思っていたものは、実は、魔法のステッキだったのです。サンドラはイスに乗って、ハヤには届かない高いタンスの上に、傘をのっけてしまいました。

「……でも、魔法でモノを動かせるなら、イスじゃなくて、傘の方を動かせばいいのにね」
縁側に腰かけ、膝の上のネロをなでながら、首をかしげるハヤ。

「……」
ネロには、その理由が分かりました。魔法は「重ねがけ」することはできないのです。
あの傘には元々、魔法がかかっていたから、違う魔法はもう、かけられなかったのです。

それから数日後。
うなだれて、門の前に立っていたハヤに、ネロがおどろいて駆け寄りました。
「どうしたの？　こんな朝早くに。学校に行く時間でしょ？」
「……ネロ、ネロって使い魔だから、どんな声でも出すことができるんだよね？」
ハヤのママの声で、学校に「今日はお休みさせます」と連絡を入れたネロは、前脚ふた

つで「よっ……こらしょ！」と、電話機の受話器を置いて、振り返りました。
「……さ、説明してもらおうか？」
事のてんまつは、こうです。
昨日のお昼休み。四年三組のみんなは、ほとんどが校庭に出て遊んでいました。教室に残っていたのは、席で「ドリトル先生」を読んでいたハヤと、机の間をオニごっこしていたケン君、マコト君の三人だけ。
ケン君が笑いながらマコト君に掴みかかって、窓ガラスに「ドスン！」と、その体を押し付けました。
おどろいて、ハヤが顔を上げます。
マコト君が身体を入れ替え、お返しとばかりに今度はケン君を「ドスン！」と押し付けました。その衝撃で、窓ガラスに「ピシッ！」とヒビが入ったのを、ハヤは見ました。
ふたりがハヤを振り返ったので、ハヤはあわてて、本に目をおとしました。
何ごとかをささやきあったふたりは、カーテンをひいて、ヒビをかくしました。
午後の授業になり、けれどもハヤは、お昼休みの出来事が気になって、分数の計算に集中できません。

授業が終わった後、ハヤは廊下で先生を呼びとめました。これ以上、胸の中にヒミツをかくしたままにできなかったのです。

かえりの会のあと、ケン君とマコト君は、先生に連れられていきました。

……これから怒られるのだろう。でも、悪いことをしたのだから仕方ないよね……

図書室に寄る気にもなれず、校門を出たハヤでしたが、ほどなく、誰かに名前を呼ばれたような気がして、振り返りました。

ケン君とマコト君が、校門のところから、こちらを見ていました。

ハヤの胸が「バクン！」と弾けて。

ふたりが、こちらに向けて駆け出してきました。びっくりしたハヤは、いちもくさんに逃げ出しました。

「……それで今朝は、学校に行くのが怖くなっちゃったんだね？」

縁側で、うつむくハヤの話を聞いているネロ。

「ねえネロ……どう思う？　わたし、悪いことなにもしてないのに」

「正しいことのためだからといって、手順や手段はどうでもいい、ということにはならな

いよ」
とつぜんの背後からの声に、ハヤはおどろいて振り返りました。いつの間にか、サンドラがそこに立っていました。
「もしかしたら、そのふたりは後で、自分たちで先生に謝りに行くつもりだったのかもしれないよ」
「ええっ……だってそんなの、すぐに言わない方が悪いし……」
「あんたはまず、先生じゃなくて、ふたりと話してみるべきだったんじゃないのかい？」
ハヤは言い返すことができず、だまりこくってしまいました。

結局、ハヤは次の日も、その次の日も、屋敷にやってきてしまいました。
ネロを膝の上にのせて、縁側からヒツジ雲を見上げ、つぶやくハヤ。
「……ネロ、明日はわたしの誕生日なんだ。でもなんだか、サイアクの誕生日になりそう」
「……」
ハヤが見上げているのは、本当は、うるんだ瞳から雫があふれないためでした。
金曜日。今朝も大きなため息とともに、ハヤが門を入ると、ネロがとび出してきました。

「サンドラが！　サンドラが……」
慌てて玄関から奥へ向かうと、サンドラがタンスの前で倒れています。丸イスが転がっていて、畳にはあの傘が落ちていました。
きっとサンドラは、傘を下ろそうとして、イスを踏み外してしまったのです。
大急ぎで布団を広げて、サンドラを寝かせたハヤ。
「背中を強く打ったみたい。薬を塗れば、良くなると思うんだけど……」
「ネロに塗っていた、あの薬ね」
「どうしよう……あれで最後だったんだ。森の魔法具屋まで、買いにいかないと……」
ネロは、ハヤの正面にちょこんと座り直し、前脚を揃えて、頭を下げました。
「お願いだよハヤ、サンドラを助けて！」

ハヤが屋敷の勝手口を開けると、そこには大きな山がそびえたっていました。
「そんな……ここは、住宅街のはずなのに」
目を丸くしているハヤに、ネロは言いました。
「魔法具屋は、あの山と、その向こうにある湖、さらに国境の壁を越えた先の、森の中に

あるんだ。……その傘を持っていけば、きっとたどり着けるはず」
「うん。必ず薬を持ち帰ってくるからね！」
ハヤは急こう配を、のぼり始めました。
すぐに、息が切れはじめます。持ってきた「にじいろの傘」を杖がわりにして、汗のしょっぱ味をクチビルにおぼえながら、けれども決して休まずに、ハヤは歩き続けました。
ようやくたどり着いた頂上で、しかし、途方にくれてしまったハヤ。
山の反対側は、断崖になっていたのです。ここを下るなんて、絶対にムリです。
しゃがみ込んでいたハヤのかたわらに、カラスが舞い降りました。
「こむすめさん。こんなところで、どうしたんだい？」
「……この崖が下りられずに、困っているの」
「お前さんは、魔法の傘を持っているじゃないか。それはパラシュートの代わりになるはずだよ」
言われたハヤは、傘を開きました……でも絶壁から、とび下りる決心がつきません。
「さあ、勇気を出して！」
カラスの言葉に、ハヤは目を固く閉じ、傘の柄に抱きついて、ジャンプしました。

ほどなく目を開くと、ハヤはユラユラと風に揺られながら、ゆっくりと落ちていくところでした。

無事に着地したハヤの眼前に、今度は巨大な湖が広がりました。向こう岸はかすんでいて、うかがい知ることはできません。

岸辺でハヤがしょげかえっていると、水の中からカエルが顔を出しました。

「こむすめさん。こんなところで、どうしたんだい？」

「この湖が渡れずに、困っているの」

「お前さんは、魔法の傘を持っているじゃないか。それは舟のかわりになるはずだよ」

言われたハヤは、開いた傘を逆さまにして、湖面に浮かべてみました……でも、なかなかその上に乗る決心がつきません。だって、もし沈んでしまったら、ハヤは泳げないのです。

「さあ、勇気を出して！」

カエルの言葉に、ハヤは目を固く閉じ、傘にとび乗りました。

しばらくして目を開くと、傘は湖面をスイ〜スイ〜……と、勝手に進んでいくところで

した。

対岸におり立ったハヤの行く手を、今度は、高いたかい壁がふさぎました。

これがネロの言っていた、国境の壁でしょう。苔がびっしり生えていて、はるか昔に造られたものみたいです。

うつむいていたハヤの足もとから、モグラがひょっこり顔を出しました。

「こむすめさん。こんなところで、どうしたんだい？」

「この壁が越えられずに、困っているの」

「お前さんは、魔法の傘を持っているじゃないか。それはドリルのかわりになるはずだよ」

そう言われて、ハヤは傘を閉じたまま、壁に当てて、回してみました。

あっという間に、大穴が開きました。

しかし、進んでいくと、トンネルの中は真っ暗です。なんてぶ厚い壁なんでしょう。

もし、上から岩が崩れてきて、生き埋めになってしまったらどうしよう……

「さあ、勇気を出して！」

暗闇の中で、どこからかモグラの声が聞こえました。ハヤは歯を食いしばり、けんめい

に傘を回し続けました。
とうとう眼前に光があふれ、開通したトンネルの出口で、ハヤはヘナヘナ……と、座り込んでしまいました。
けれども、森の中へと続く道を見つけたハヤは、すぐに立ち上がりました。

樹々にかくれた泉のほとりに、レンガ造りの、小さな家がありました。
ノックしてドアを開けると、床には壺やタル、棚には瓶がいっぱいの部屋の中で、黒いローブの人が、ハヤを振り返りました。
まるで、闇を着込んでいるみたい……だって、ハヤから見えるのは、ふたつの目と、指先だけです。
「おや、その傘……あなたは大魔導士サンドラの、使いの方ですね？」
低くてシブい、男の人の声です。
「あっ、はい、えっと……」
「ご依頼の物、ちゃんと包んでおきましたよ」
男は、リボンが結ばれた小さな箱を、ハヤに手渡そうとしました。

「あのっ、そうじゃなくて……サンドラがケガをして、わたし、薬を貰いに来たんです！」
「なんと。そうだったのですか」
ハヤから銀貨を受け取った男は、ケガの説明もしないうちから、棚の瓶を下ろし、箱と一緒にかずら編みのポシェットに入れて、ハヤの肩にかけてくれました。
「あれっ？　……あの……」
「……あ。……と、ところでこむすめさまは、魔法の傘の上手な使い方を、知らないようですね？」
「えっ、どうして？」
「水に濡れたすそや、汚れたほほを見ればね」
男は、窓を開け放って言いました。
「傘を開いて、持ち手の先っぽのところに、靴をのせてみてごらんなさい」
ハヤがそこにつま先を乗せると、傘はひとりでに、宙へ浮かびあがりました。
「すっ、すごい！」
これなら屋敷までひとっとびです。透明窓からちゃんと、前方を確認することもできます。

空高く、ハヤは飛び立ちました。

「ネロ、ただいま！」

屋敷に戻ったハヤは、いちもくさんに和室へと向かい、サンドラの背中に、てきぱきと薬を塗り、包帯を巻き付けました。

ほどなくして、サンドラが起き上がり、ネロが「サンドラぁ〜」と涙声で、その胸にとびつきました。

「よかったぁ……すごい薬の効き目ね……あっ、そうそう、サンドラ、これ」

ハヤがリボンのついた箱を見せると、サンドラは、目をそらして言いました。

「あんたが開けな。もともとあんたに、あげるつもりだったんだから」

ハヤは、ハッとしました。

中には、赤い宝石飾りの付いたヘアゴムが入っていました。

「勇気のポニーだ！」

声をうわずらせたネロ。

「これで髪を結わえると、みるみる勇気がわいてくるっていう魔法具だよ！」

「うれしい、でも……」
ハヤは、ポニーを箱に戻して、サンドラの膝の上にのせました。
「誕生日プレゼントなら、サンドラから直接、渡してほしいな」
サンドラの顔が、真っ赤になりました。
サンドラは、一度、深呼吸をすると、箱を両掌の上にのせて、小刻みに震わせながら、ハヤに差し出して言いました。
「お、お誕生日、おめでとう、ハヤ……」
ハヤは、サンドラの胸に顔をうずめ、自分も苦しくなるほどに強く、その身体を抱きしめました。

玄関に立つハヤの、その後ろ髪は、「勇気のポニー」でまとめられています。
サンドラがキセルをクルクルと回して、ハヤのおでこをコツンと叩くと、西の空の太陽が戻ってきて東に沈み、また西から昇って東に沈み……を、数回繰り返しました。
ハヤの「時間」が、はじめに学校を休んだあの朝に、戻ったのです。
「それじゃあ、行ってきます」

ハヤは学校への道を、歩き出しました。
まずケン君とマコト君に会って、話をしよう。……大丈夫。わたしはあの冒険で、何度も勇気を振り絞ることができた。
それに今は、このポニーもあるから。
ハヤを見送りながら、サンドラの胸に抱かれたネロが言います。
「……カラスに化けたり、カエルに化けたり、モグラや、果てには人間にまで……僕、もうクタクタだよ」
ネロの頭をゆっくり、ゆっくりとなでるサンドラ。
「サンドラもまあ、台本から主演まで、熱心なことだね。あのプレゼントだって、はじめから自分で渡せばいいのに。弱虫なんだから」
ネロは目を細めて、言いました。
「でも僕、気付いちゃった。あのヘアゴム、本当はなんの魔法もかかってないでしょ？」
魔法は「重ねがけ」することはできないのです。サンドラのキセルで、ハヤには「時もどりの魔法」がかかりました。と、いうことは……
「あの子なら大丈夫。魔法なんか無くたって、優しくて、なによりとっても強い子なんだ

からね」

その言葉に、サンドラを見上げたネロは、目をまんまるに見開きました。

だってそれは、ネロも初めて見たかもしれない、サンドラの笑顔だったのですから。

さるいわ

千雲　さや

「うわあ、猿だ！　猿そっくり、すっごくおっきいね」

カンタは小学五年生。この夏休み、初めておばあちゃんが住んでいる風波島に遊びに来たカンタは、これまた初めて見る猿岩に驚き、思わず大きな声をあげました。玄界灘に浮かぶ風波島には、「猿岩」と呼ばれる、横を向いている猿の姿にそっくりな大きな岩があります。海に向かって立っているその姿は迫力があり、青い海と空、岩に寄せる白波とのコントラストが美しく、有名な観光スポットになっています。今もたくさんの観光客が

「猿だ！　見て、映えるぅ！」

「何て大きいの！」

カンタのように歓声を上げながらスマホを向け、たくさん写真を撮っています。

猿岩の体の部分は深い緑色の樹々におおわれ、まるで哲学者のような深い眼差しの先に

は、夏の太陽に照らされてキラキラと輝く青く美しい海がどこまでも広がっています。

カンタはしばらく猿岩を見つめて言いました。

「なんかさ、この猿さ、海をじっと見ててさ、なにか考えてるみたい。見守っているのかな。うーん、ちょっとまぶたのとこが悲しそうにも見えるんだけど」

そう、まるで猿が、海からやって来る何かから、島を守るかのように、そこに静かに立っている――そのようにカンタには思えたのです。

「そうやろう。猿が広か海ばじいっと見て、何か考えとるごと見ゆるやろ。こん猿岩にはね、言い伝えのあるとよ。ちょっと長うなるけど話ば聞くね」

とおばあちゃんが言いました。

「うん、聞きたい！」

カンタがそう言うと、おばあちゃんは売店のベンチに座り、さっき買ったお菓子とジュースをカンタに差し出しました。二人の目の前には猿岩が見えます。おばあちゃんは「ふうっ」と一度大きなため息をついてから静かに話し始めました。

風波島は周りを海に囲まれ、海の幸、山の幸にめぐまれていました。また、平野が多く

水源もたくさんあったので昔から米作りも盛んで、人々は豊かに暮らしていました。そして森には動物達もたくさんすみ、猿達もその仲間でした。

ある村に弥助というとても優しい若者がひとりで暮らしていました。弥助は海で魚をとりながら畑で野菜も作る働き者でした。

「キキー、ギャアー！」

ある日の夕方のこと、家の畑の方でけたたましい叫び声がしました。

「何やろうか、今の声」

心配になって弥助が行ってみると、一匹の猿が地面に倒れていました。よく見ると、その腕の中には小さな赤ちゃん猿がぶるぶるとふるえていたのです。何かの理由でなかまの群れからはぐれた猿の親子のようでした。

「かわいそか、母さん猿はもう生きとらん。まだ赤ちゃんとに、ひとりぼっちになってしもうて」

弥助はふるえている赤ちゃん猿を抱いて家に連れて帰りました。そして布で体をくるみ、人間の赤ちゃんみたいに紐でおんぶすると畑に戻り、母猿を畑のすみに埋めました。そこには三年前に流行り病で亡くなった弥助の両親のお墓もあります。赤ちゃん猿は弥助

の背中をしっかりつかみ、じっとしています。
「おれも父ちゃんも母ちゃんもおらん、ひとりぼっちたい。ひとりぼっちどうし、いっしょに仲良う暮らそうや」
弥助は肩越しに赤ちゃん猿に優しく話しかけました。
「お前の目は大きゅうて利口者に見ゆる。名前は大助にするぞ。おれは弥助、今から家族たい」

それからというもの、二人はまるで親子のように、兄弟のように仲良く暮らしました。
村の人たちは、
「弥助も物好きたいね、猿といっしょにくらすって」
と、笑いながらも二人を温かく見守り、時には
「これ大助に」
と、牛の乳や畑でとれた桃やなしを持ってきてくれました。優しい弥助に可愛がられ、大助はすくすく育ち、すっかり若者の猿に成長しました。体も大きく、毛も明るい茶色で、日の光に照らされるときらきらと光りました。そして何よりも目立つのはその澄んだ大き

な瞳です。その瞳はいつも何かを考えているような深い色をたたえていました。

大助は、弥助が思った通り、とても賢い猿でした。弥助の言葉の意味もほとんど分かり、聞き分けの良さはまるで人間のようでした。畑で作っている野菜をねらってくる動物達を追い払ったり、たきぎを山から集めてきたり、簡単な仕事を手伝ったりとよく働きました。ときどき二人で弥助の両親と大助の母さん猿が眠っているお墓にお参りして、元気にくらしていることを知らせました。弥助が風邪をこじらせて寝込んだ時、大助は心配して、片時もそばを離れようとはしませんでした。

「ありがとなぁ、大助。お前のおかげでおれは幸せばい」

弥助が大助の顔をなでながら語りかけると、

（おれも同じ）

とでも言うかのように、大助は賢そうな瞳を輝かせ、こくんとうなずきました。こうして弥助と大助の絆はますます深まっていくのでした。

いつからでしょうか。

「クーッ、クワーッ、クワンクワン」

などの鳴き声が弥助の家の周りで聞こえるようになったのは。そのたび大助は緊張して、耳をそばだてじっとしていました。ある朝早く弥助が漁に出かける時に、畑の奥の樹々がザワザワザワと揺れていました。サササッと隠れたのは猿のようでした。弥助は気になりながらも漁に出かけました。そのうち弥助は、自分が漁に出る時に限って鳴き声が聞こえること、猿達の姿が樹々の間に見え隠れすることに気が付きました。何か今までとちがうことが起きていると不安になりました。

猿の気配が何回か続いたある日のこと、漁から帰って来た弥助は母さん猿のお墓の前にじっと立っている大助の姿を見ました。

「大助、帰ってきたぞ」

弥助が呼ぶと大助はすぐに走って来ました。そしてあの大きく輝く瞳で弥助をじっと見つめるのでした。

「なんかおれに言いたかことのあるとじゃなかか。お前が話せるならよかとになあ」

その日から何日か過ぎたある日のこと、漁から帰ってきた弥助は、家のすみにうずたかく積み上げられた木の枝や枯れ木を見て驚きました。いつの間にこんなに集めたのでしょ

うか。数年分の焚き物の量でした。何が起きたか分からない弥助が家の中に入ると、板の間の上にこれまた木の実や山菜などがたくさん固めて置いてありました。まるで置き土産のように。

「大助！　大助！　どこにおるとかあ！」

大声で叫びながら弥助が外に飛び出すと、大助は母猿のお墓のそばに立ってじっと弥助を見ていました。あの大きな瞳に深い悲しみの色をたたえて。

そしておどろくことに大助の頭上の樹々には、たくさんの猿達がいたのでした。

「だ、大助、どうしたとか。もしかしてお前は行くとか。おれからはなれて、その猿たちとどっかに行くとか！」

大助は弥助をじっと見つめたまま、まるでこれまでのお礼をするかのように何度かこくん、こくんとうなずくと、パッと樹に登り、ヒュンヒュンと木の枝を伝って山の方へ消えていきました。その大助の後を、たくさんの猿たちが追っていきました。樹々がザワザワザワッと大きくゆれました。

「大助！　行くな！　大助ーっ」

弥助の叫び声はやがて夕暮れの山の中に吸い込まれ、辺りはしんと静まりかえりまし

た。

「大助は、人間のおれと暮らすより、仲間の猿と暮らす方ば選んだとか」

これまで二人で暮らした年月を思い、弥助はがっくりと肩を落とし、とぼとぼと家に帰りました。ひとりの家はこんなに広かったのかと思うほどがらんとしていました。

「今日からひとりか」

大助がとってきたであろう木の実を一つつまんで口に入れると、あまずっぱさと一緒にこれまでの思い出が次々とよみがえり、弥助の目から涙があふれてきました。

いつの間に眠ったのでしょうか。

「カンカンカンカン！　カンカンカンカン！」

けたたましい鐘の音で弥助は目が覚めました。火事や嵐など村に何か危険な事が起きた時しか鳴らない鐘が今、激しく打ち鳴らされています。

何事だろうと跳ね起きて外に出てみると、弥助達の船がつないである海の方がぼうっと光って見えました。

「なんやろう、あの光は」

と、不思議に思い海の近くに行ってみると、見たこともない形の大きな船が次々に海岸に押し寄せていたのです。そして見たこともない格好をした男達が手に弓矢や刃物のような武器を持って次々と浜辺に降り立ったのです。男達は遠い海の向こうから攻めてきた外国の兵士達でした。

「これが『元寇』って言うとよ」

おばあちゃんはここでいったん話を止めました。

「聞いたことある！　僕、歴史大好きでさ、六年生になったら社会科で習うんだけど、図書館でいろんな戦国武将の本を借りて読んでるんだ。でも元寇についてはくわしいことは知らないなあ」

カンタが言うと、おばあちゃんはとても悲しそうな顔をして言いました。

「それはそれはむごたらしか出来事でね。とてもカンタには話せんくらい風波島の人達はひどか目におうたとよ。いまから八百年くらい前たいね。みんな平和に暮らしとったとに、誰も、なあんも悪かことばしとらんとに、いきなり、よそん国から攻めちこられて、命ば奪われて、遠か国に連れち行かれて……戦争っちゅうもんはそがんもんたいね。ほんなこ

て、おそろしか……いつの世になろうとも、絶対にしたらいかんと」
大きなため息をつき、猿岩に目をやると、おばあちゃんはまた話し始めました。

「みんな山へ逃げろーっ！」
「助けてくれぇ！」
兵士たちは何か叫びながらどこまでも追ってきます。矢もヒュンヒュンと飛んできます。村の人達は逃げて逃げて山の中に隠れました。弥助は転んで歩けなくなったおばあさんをおんぶして逃げていました。このおばあさんは大助が赤ちゃんの時に、よく牛の乳を絞って持ってきてくれた優しい人でした。弥助は走りに走りましたが、とうとう兵士に追いつかれてしまいました。そこはちょうど弥助の両親と大助の母さん猿のお墓があるところでした。もうだめだ！　兵士の刀が弥助めがけて振り下ろされようとしたその瞬間、
「キキッ、ギャーッ！」
大きな雄叫びと共に何かが兵士の顔に覆い被さりました。
猿です！　一匹の猿が兵士の顔に噛みつき爪を立てて引っかきました。
「うぎゃあー！」

兵士は悲鳴を上げると、地面を転げ回っています。その猿は兵士から離れると、弥助の方を見ました。

「だ、大助」

茶色に光る毛並、そして何よりも賢そうに輝く大きな瞳を持つその猿は、まぎれもなく大助でした。大助は弥助をじっと見つめ、まるで「大丈夫」とでも言うかのように、こくんとうなずくと、まだ後から次々と攻めてくる兵士達に鋭い視線を送りました。そして素早く樹の上に登ると

「グワーッッ！」

と激しく叫びました。その声を合図にたくさんの石つぶてが兵士達を襲いました。いったい何匹の猿が樹の上にいたのでしょうか。

「ギャーッ、ギャーッ！」

猿たちは歯をむき出し、兵士目掛けて次々に石を投げました。そして倒れた兵士達に噛み付いたり引っかいたりして襲いました。よく見ると、樹の上で石を投げる猿と、地上で攻撃する猿と役割を分けて戦っています。その指揮を取るのはあの大助でした。兵士たちは、いきなり頭上からたくさんの石つぶてが飛んできたり、猿の大群が激しく襲ってきた

りしたので、何が起きたかわけが分からず散り散りになって逃げていきました。
「ありがとう。ありがとな、大助。
おれたちば助けてくれて、ほんなこてありがとな」
大助は猿の集団のボスのようでありました。大助の命令で猿たちは兵士たちを攻撃し、村の人々を守ったのです。矢や剣でおそわれ、大きな怪我をしたり、中には命を落としたりした猿もいました。村の人達は猿たちに深く感謝をし、手を合わせて拝みました。これからどうしようかとみんなが考えていた時に、海の様子を見に行っていた村人が叫びました。
「大変だーっ、また来たぞおっ」
今度は一つ向こうにある山側の崖下にある岩場に次々と船が着き、武器を持った兵士たちが船から降りようとしていたのです。
「キキッ、ギヤーッ！」
大助が鋭く叫ぶと猿たちは山側の崖に向かっていっせいに移動しはじめました。
そして今度は崖の上から大きな岩を落とし始めたのです。下にいた兵士たちはいきなり大きな岩が船の上に落ちてきたので驚きました。いつ岩が落ちてくるのか分からないた

め、岩場に降り立つことができません。しかし、猿たちが落としていた岩はやがて数がつきてしまいました。一方、船は海の向こうから次々にやってきて、崖の下に集まりだしました。もう岩が落ちてこないと思ったのか、兵士たちが岩場に降り立とうとしたその瞬間、

「ブシャァーァァァァ！！！」

という、これまで聞いたことのない耳をつんざくような爆音と共に、おびただしい水蒸気が海からモクモクと雲のようにわき上がってきたのです。と、同時に海の底から何か膨大な力があふれだし、波がまるで生き物のように「ザババァッ」とせり上がると、兵士たちが乗っていた船を一気に飲み込みました。そしてその波は水蒸気とともに崖の上にも這い上がり、崖ごと猿たちをも飲み込んだのでした。

「だ、大助ーっ！」

届くはずもないほど離れているのに、弥助は思わず手を伸ばしました。もうもうと上がる水蒸気はかなり離れた弥助たちがいる山側にも押し寄せました。地面は立っていられないほど揺れ、周りは何も見えなくなりました。しかし、弥助は確かに見たのです。意識が遠のく瞬間、崩れ落ちる岩と波の間に、あの大きな深い色をたたえた大きな瞳を。

それからいったいどれだけの時が経ったのでしょうか。いつの間にか水蒸気のもやは消え、しんとした静けさの中、夜明けの光があたりをやわらかくつつんでいました。弥助と村人たちはそろそろと起き上がり、海の方に目をこらすと思わず声を上げました。

「こりゃ、どうしたことか」

あわいぶどう色とうすいオレンジ色に染まった空の中に、昨日まではなかった巨岩が現れていたのです。その巨岩はまるで猿のようでした。大きな猿の岩が海を見つめて、じっと立っているのです。その視線の先には朝日に照らされて輝き始めた美しい海がどこまでもどこまでも広がっています。あのおそろしい兵士たちやたくさんの船、戦ってくれた猿たちの姿も、もうどこにもありません。今までの出来事が本当にあったとは思えないほど、海も山も空も今は美しく、静かにそこにありました。

海を見て立っている猿岩のまなざしは、深い色をたたえていた、あの大助の瞳に似ているように弥助には思えてなりませんでした。

「おまえは、もしかして大助か。そうじゃろう。島ば、おれたちば守って、岩になったとじゃろう？」

猿岩の足元には穏やかな波が寄せては返し、まるで昨日の出来事を
「よくやったね。みんなを守ったね」
と、ねぎらっているかのようでした。
弥助の目から涙がぽろぽろとあふれてきました。
村人たちは猿岩に向かって両手を合わせ、いつまでもいつまでも祈っていました。

海はどこまでも青く静かに輝き、猿岩はまるで島を守るかのように、そこに静かに立っていました。

「それから風波島にはこの海の向こうから、だあれも攻めてくることはなく、今日までずっと平和が続いとるとよ」
おばあちゃんの話はそこで終わりました。
「あの猿は岩になって海をじっと見ているんだね。これからもきっとずっと、あそこに立って島がいつまでも平和であるようにと見守っていくんだね」
カンタはもう一度猿岩を見つめました。

五月の日差しがおばあちゃんとカンタをやわらかく包んでいます。空はどこまでも青く、海もそれにこたえるかのようにどこまでも青く輝いていました。

ユキメガネ

岬　とうこ

朝、雪におおわれた峠の道を、ゆるゆるとのぼっていく青いレンタカーがありました。

「こン雪なら、でっかか雪だるまの作れるばい。やっぱ雪国はちがうねえ、兄ちゃん」

助手席で瞳を輝かせるのは圭太。コンビニのおにぎりを口いっぱいほおばっています。

「なーんが雪だるまか。こっちはスリップせんごと必死で運転しよるとに」

ぎゅっとハンドルを握ったまま、顔をしかめたのは猛。長年配送の仕事をしてきましたが、これほど雪深い土地での運転は初めて。雪道専用タイヤとはいえ、慎重にならざるをえないのです。

「あっ、アレが目印の大木じゃなかと？」

圭太がごはんつぶのついた指で、峠のてっぺんをさします。

「『ケヤキヤ』やけん、欅の木やろか。でっかさ～」

たしかに前方左手に堂々たる巨木が――。その足元には小さな建物が、タニシのようにへばりついています。

（やれやれ、やっと着いたか。はようブツぶもろうて先ば急がんば……）

車はみすぼらしい小店の前でとまりました。

たてつけの悪い引き戸を開けると、小柄なおばあさんがよちよちとあらわれました。

「いらっしゃい」

「どうも〜。あっ、ストーブ！」

ごちゃごちゃと生活雑貨がおかれたせまい店内。中央でごうごう炎を上げるだるまストーブに圭太がかけよります。両手をかざし、

「ああ、ぬく（温か）か〜」

「ぬくい？　おたくら九州の人かね？」

おばあさんが一本欠けた前歯で、にいっと笑いかけます。銀髪のお団子ヘアに黒ぶちの丸メガネ。はおった桃色のはんてんと同じく、ほっぺもつやつやした桃色です。

「なつかしいねえ。死んだ亭主も九州の出さ」

「えっ、おい（おれ）たちは長崎から――」
「圭太ッ！　あ、あの『ユキメガネ』をかりにきました」
あわてて口をはさむ猛。話好きらしい店主と、年寄り子どもにやたらと好かれるお人よしの圭太。くだらぬおしゃべりで時間をくうのはまっ平です。
「ユキメガネ……ああ、あるよ」
声のトーンを下げ、目を細めるおばあさん。
「あんたらきょうだいかい？　ちっとも似てないねえ。師匠からの指示書を見せておくれ」
だまって、しわくちゃの紙を差し出す猛。そこには、汚い字でこう書かれていました。

タイボクノソバノ　ケヤキヤ　カラ
ユキメガネヲ　カリ　カケテコラレタシ。
ユキヨムラ　シショー

「たしかに師匠の字だ。ちょいとお待ち」
そういって、店の奥へ消えたおばあさん。猛が小声で圭太をしかります。

「おい、時間のなかとやっけん、よけいなことばしゃべるな！」
「ごめん。ばってん（でも）、あのおばあさんにユキメガネの使い方ばきかんでよかと？」
「よか！　ただのメガネたい」
「けど、おいたち視力はよかし……」
そこへおばあさんが戻ってきました。両のてのひらには、二本の銀ぶち丸メガネ。ほっそりした銀のフレームには気品がただよい、キラキラ光り輝いています。
「わあ、カッコよか～」
おばあさん、みとれる圭太にうなずき
「これがご所望のユキメガネさ。ふつうのメガネと同じ、鼻の頭にのっけておゆき」
差し出されたメガネを受け取る二人。おばあさんにうながされ、おそるおそるかけてみます。
「あれまあ、なかなか似合うじゃないか。峠をおりたら町に出る。雪夜村はそのずうっと先だ。頑張っておいでよ」
にんまり笑うおばあさんの瞳が、キラリと光りました。

こうしてユキメガネをかけて出発した二人。

「兄ちゃん、コレ、度の入っとらんね。羽根ンごと（のように）軽かけん、かけとる気のせん」

「うん」

「雪国ならではのメガネやろか？　新しか仕事で使うとかもね」

体重がゆうに百キロを超える圭太。色白で糸のように細い目に三重あご。上を向いた小鼻にちょこんとのった丸メガネが、ますますお人よしに見せています。

（新しか仕事か……なんばするとか知ったら、コイツ驚くやろうな）

心の中でため息をつく猛。ひと月前のできごとがよみがえってきたのです。

夏の終わり、猛が働いていた食品おろし会社が倒産しました。圭太がバイトしている居酒屋も不景気で、お給料が半分に。次の仕事が見つからず、焦った猛はある日の夕暮れ、町外れの一軒家へ足を向けました。

（耳の遠かおじいさんのひとり暮らし。去年配達にきたとき、金のありそうやったし……）

はなれた場所からながめていたときです。いきなり塀のかげから灰色の腕が飛び出し、猛の首に巻きつきました。ものすごい力でしめられ、暗がりに引きずり込まれます。

「ヒ、ヒヒ、ヒイッ〜！」

「……お前、空き巣の下見にきたな」

耳元でささやく、ドスのきいたしゃがれ声。

ゾゾ〜ッと、全身に鳥肌が立ちます。

「ゲホッ……ちがいま……たまたま通り……」

息ができず、声を出すのもやっと。

「フン、かれこれ一時間はのぞいてたくせに。空き巣の師匠の目はごまかせねえぞ」

ギリギリとしめ上げられる首。

「うぐぐ……苦し……シ、シショーって……空き巣のプロ……ですか？」

「おうよ」

「じゃあ……弟子にしてください」

「はあ？」

いきなり首の腕が外れ、地面に倒れ込む猛。ゼイゼイ息をしながら、暗がりの人影に頭

を下げました。
「ぼく、失業してお金が……その……」
「〇〇県のユキヨムラへこい。本気ならな」
そういうが早いか煙のごとく消えた人影。猛の上着のポケットに、地図のついたしわくちゃの紙を残して――なんと数枚の一万円札もいっしょでした。
（圭太にはほんとのことばいうとらんけど、ユキヨムラへ行くだけ行ってみよう。師匠に会いに！）

車は峠をくだり、ようやく町らしき通りに入りました。交差点で左折したときです。猛の耳元でしゃがれた声がしました。
「ユキハ　タノシヤ　オソロシヤ
オマエノ　チカラヲ　ミセトクレ」
「えっ!?」驚いて急ブレーキ。
「うわっ！」
思いきり前につんのめった圭太が、チョコバーをおでこにグチャリ！

「どどど、どうしたと？」
「圭太、なんか声のきこえたろ？」
「声？　うんにゃ（いいや）。もう～、メガネにチョコのついてしもうたたい」
口をとがらせ、ユキメガネをぬれティッシュで拭く圭太。「よかった、割れんで」
「なあ、ほんとになんもきこえんやったか？」
「ラジオの音だけって！　そろそろどっかで休けいして――あっ！」
「うわっ！」
今度はそろって声を上げました。
商店の屋根からなだれ落ちた雪のかたまりが、歩道の小学生たちをのみ込んだのです。
「ヤバッ！」
「はよ助けんば。急げっ！」
ダッシュで外へ飛び出す二人。
「大丈夫かーっ！」
ところが――近づいてみると、落下したはずの雪はなく、小学生たちもぽかん。
「え？」

「なんで？　さっきたしかに……」

グググ……

頭の上で不気味な音がして、猛と圭太は顔を上げました。そこには、まさに落ちんとせん巨大な雪のかたまりが――。

「うわっ！」

「逃げろ～っ！」

間一髪で小学生を押しやった二人。ですが自分たちは雪の下敷きになりました。

「大変だぁ～っ」

「みんな手をかせ！」

近所の大人たちが駆けつけ、雪まみれで転がっている二人を助け出します。

「あなたがたはこの子たちの命の恩人だ」

「なんとお礼をいえばいいか」

「お兄さんたち、ありがとう！」

小学生と町の人々に礼をいわれ、商店から焼きたてパンや飲み物や焼き芋をどっさりもらった二人。照れながら車に戻り――メガネをかけた顔を見合わせました。

「兄ちゃん、さっきのはなんね？　最初に見たとは錯覚やろか？」
「……わからん」
首をひねりつつ、車をスタートさせた猛。
空から降る雪は勢いを増し、たたきつけるようにフロントガラスを白く染めていきます。

それからどれくらい走ったでしょう。車はようやく小さな集落に近づきました。
ですが田も畑も家々もすっぽり雪に埋もれ、昼間だというのに人っ子ひとりいません。
「兄ちゃん、ここが雪夜村？」
「多分そうやろ」
「なんか腹のへった。コンビニなかかな？」
「さっきもらったパンや焼き芋は？」
「全部食った」
「はあ？　なんでおいの分ば残し――」
猛が声を荒げたとき、また耳元で声がきこえました。

「ユキハ　タノシヤ　オソロシヤ
オマエノ　チカラヲ　ミセトクレ」
「あっ！」
またもや急ブレーキ。圭太がガクンと前につんのめります。
「いてっ！　ごめん兄ちゃん。そげん怒らんでも――」
「シッ！　今度こそ圭太にもきこえたやろ？」
こわばった表情で、猛がささやきます。
「……なにが？」
「声さ。『ユキハタノシヤ』って」
「ユキ？　きこえんやったけど……」
圭太、薄気味悪そうに兄を見て、
「やっぱ疲れとるばい。はよ宿ば探そう」
「ちょっと待て。そういえば……」
じっと考え込む猛。「さっきもあの声ばきいたあとに子どもたちが……もしかして」
と、車窓から外をキョロキョロ。ユキメガネの奥から点々とちらばる家々に目をこらしま

す。首を右へまわしながら、「あっ！」
「なんね？」
「おい、あそこっ！」
「あそこ？」
「ほら、あの赤か屋根の軒下……雪ン中に人の姿の見えんか？」
「人？　まっさか～」
鼻で笑いつつ、身をのりだす圭太。するとユキメガネの奥の細い目に、雪の下で横たわる人影がはっきりと映りました。
「わっ、たしかに人間かも。助けんば！」
そろって車を飛び出し、膝までの雪に足をとられながらも必死に軒下へ。両手で雪をかき出し、
「圭太、携帯で救急車ば呼べ！　警察も！」
「わかった！」
それから大わらわ。なんとか雪の中から高齢の男性を助け出したのと同時に救急車が到着。男性は病院で一命をとりとめました。

「お二人のおかげです。どうぞ今夜はここへお泊りください」
その夜、猛と圭太は村の宿屋に招かれました。家族や村長をはじめ、村じゅうの人々から歓待を受けたのです。
おいしい料理と地酒でもてなされ、顔を赤くした二人。
ですが――ふしぎなのです。
「雪下ろし作業中に屋根から落ちたらしいが、あの雪だまりからよく見つけられましたなあ」
「地元のわしらでも気づかんかったのに、大したもんだ～」
村長や警察の人にさんざんほめられた二人。
「はあ、メガネのおかげか人影が見えて」
「おいもです。なんかふしぎかメガネで――」
「メガネ？」
首をかしげる村長たち。「お二人ともメガネはされとらんようじゃが……」
「もしや雪の中に落とされたかの？　明日にでも若い衆に探させましょう」
顔を見合わせた猛と圭太。おそるおそる指で耳元を触ると――ほっそりしたフレームが

たしかにあります。
（もしかしてこのメガネは……）
（ほかの人には見えんと？）

深夜、宿のふかふか布団にくるまり、猛は天井を見つめていました。
「圭太、寝たとか？」
「うんにゃ。いっちょん（全然）眠れん。今日はいろいろありすぎて……」
実は二人、トントン拍子に雪夜村へのお試し移住が決まったのです。過疎地のこの村では、農作業や林業を手伝う若い人材を求めていました。
「兄ちゃん、実はおい、前から米作りに興味のあったとさ。明日は村の雪下ろしば手伝わせてもらうと。楽しみか～」
「そうね……圭太、実は話のあると」
猛は体を起こし、ぽつりぽつりと語り始めました。空き巣の下見から師匠との出会いまで、すべて正直に――。
横になったまま、だまって耳を傾ける圭太。時折グスッと鼻をすすりながら。

話し終え、猛は枕元のユキメガネを手にとりました。薄やみの中で、銀のフレームがキラリと光ります。

「おいは、あやうく圭太まで犯罪者にするところやった。ばってん、師匠とこのユキメガネのおかげで……」

「ヒーローになれたもんね」

誇らしげな声のあと、圭太がぽつり。

「けどふしぎかよねえ。そン師匠さんって何者やろ？　村の人たちも知らんやったし」

そうなのです。『雪夜村の師匠』についてたずねても、村人は首をかしげるばかり。大工さんと三味線の師匠ならいるそうですが――。

「あのさ、兄ちゃんの耳元できこえた声も師匠さんやったと？」

「いや、ちがう気のする。けどどっかできいたような……とにかく明日ケヤキヤにユキメガネば返しに行って、たしかめてみるけん」

「それがよか」

次の日です。村に圭太を残し、猛はケヤキヤへ向かいました。

今朝は雪もやみ、視界も良好。
助手席には二本のユキメガネ。圭太にピカピカに磨かれ、きれいな布に包まれています。
やがて、峠が近づいてきました。てっぺんの欅の巨木が少しずつ姿をあらわします。
ですが幹の足元には――
「えっ!?」
どうしたことでしょう。あのみすぼらしい小店はどこにも見当たりません。猛は車のスピードを上げ、欅のそばに停車しました。
「ケヤキヤは……なんで？　どこに消えたと？」
外へ飛び出し、太い幹のうしろへまわり込みます。
すると――そこにいたのは一体のお地蔵さま。古びて傾いた小さなお堂に、ちんまりとまつられています。
色あせた赤いずきんと前かけ。
その顔はどこかとぼけていて、いまにもフフフと笑い出しそうです。
（ン？　この顔どこかで……）
そのときです。耳元で声がしました。

「ユキハ　タノシヤ　オソロシヤ
オマエノ　チカラヲ　ミセトクレ」
続けて、なつかしい声がひびきました。
「猛、お前が弟ば守ってやらんば。　正しかやり方でな」
（あっ！）

気がつくと、猛はせまい路地にいました。どこもかしこも雪でまっ白。空からぼたん雪が、ひっきりなしに舞いおります。
（ここは……）
温かい指先を見ると、青いミトンの手袋をはめています。同じ青い毛糸の帽子をかぶり、首にはもこもこした毛糸のマフラーを巻いて。
（わっ、なんねこれっ!?）
なんと、猛は小学生に戻っていました。
そのときです。だれかに左の肩をつつかれました。
「ほれ、猛もちゃーんとお地蔵さまにお願いせんば」

声の主を見上げた猛。驚きのあまり、息をのみました。

（ば、ばあちゃん！）

白いかっぽう着に椿の柄のはんてんをはおったばあちゃんが、ちょっとこわい顔で猛を見下ろしています。

「長崎に珍しく雪の積もって、うれしかとはわかるよ。ばってん圭太は体の弱かとやけん、長う外におったら風邪ひくに決まっとるやろ。よくなるごとお地蔵さまにお願いしようね」

幼い猛はこっくりうなずき、ばあちゃんのとなりで手を合わせました。

「お地蔵さま、弟の熱ば冷ましてください。お願いします！」

ばあちゃんもしわだらけの手を合わせ、

「お地蔵さま、こン子らは、はよう両親ば亡くして、二人っきりのきょうだいですたい。どうぞ圭太ば元気にしてやってください。そして二人が立派に成長できるごつ、守ってやってください。お頼みします」

ばあちゃんの髪や体から、なつかしいしっぷの匂いがします。おでこや目尻のしわ、左耳の下のぷっくりしたイボまで昔のまま。

猛は胸がいっぱいで、こみ上げる涙を、ジャンバーの袖でごしごし。
そんな猛に、ばあちゃんがほほえみました。
「猛、よかね。これからもお前が弟ば守ってやらんば。正しかやり方でな」
「わかった」
猛がうなずくと同時に雪がはげしくなり、あたりが真っ白になりました。
「ばあちゃん、雪のひどくなったよ。はよ圭太ンとこに帰らんば――」
ふり返ると――そこにはだれもいません。お地蔵さまがほほえむだけでした。
（そうか、そうやったとか……）
うなだれた猛。車からユキメガネを持ってくると、両手で包み込むように、そっとお地蔵さまの足元へそなえます。
そして目をつぶり、手を合わせました。
「師匠……あなたは、昔ばあちゃんちの近所におられたお地蔵さまやったとですね。ばあちゃんの願いばきいて、悪かことばせんごと、おいたちきょうだいば守ってくださったとでしょ。ありがとうございました……」
まるで返事のように、空から雪が舞い始めました。猛の頭や肩を白く染めていきます。

どれくらいそうしていたでしょう。

目を開けた猛は――「あっ！」

お地蔵さまの足元から、ユキメガネが消えています。代わりにほろほろにくずれた雪のかたまりが――。それは風にのり、さらさらと散っていきました。

総評

「子どもたちに聞かせたい創作童話」は、今年で第四十五回となりました。応募してくださった皆様はじめ関係者の御協力に深く感謝いたします。今回は、全国三十四都道府県から、第一部（保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童向け）に七十点、第二部（小学校中・高学年児童向け）に七十一点、総計百四十一点の応募がありました。

本事業において応募作品に期待することの一つは、子どもたちに夢を育み、美しい心を育てたいという願いにかなう童話であるということです。実際、読ませていただくと、友情、家族の絆、親切心、勇気、コミュニケーション、あきらめない心、自然への畏敬、向上心、思いやり、食育、人権、正義を求める心、命の尊さ等、様々なメッセージを感じ取ることができました。これらのテーマは、読み手をはらはらどきどきさせながら、ユーモラスに、あるいはファンタジックに、あるいはノスタルジックに展開する物語の中に織り込まれています。子どもたちが心豊かに育ってほしいという書き手の思いが伝わる力作が多数寄せられたことを大変嬉しく思います。

審査においては、次の三つの観点に照らして読ませていただきました。

①子どもたちに夢を育み、美しい心を育てたいという願いにかなう童話

②正しく美しい言葉、読みやすい文章

③独自性（個性的で魅力ある作品）

力作ぞろいのため大変難しい審査でしたが、入賞した作品は、以下の点において優れていたという感想をもちました。

○　爽やかさ、明るい気持ちになる余韻、温かな気持ち、伏線回収の鮮やかさ、意欲的な生き方への共感などの読後感のよさ

○　人物の心情を象徴する巧みな情景描写

○　ファンタジーの世界と現実の場面変化に違和感がないこと

○　人物像や物語における人物の役割が明確になるように、人物の背景や関係性等が丁寧に描かれていること

○　聞き手である子どもの年齢に応じて、言葉の選択、描写の仕方が配慮されていること

○　作品の世界観に合わせた人物像、展開・構成、描写によって、物語の全体像がしっかりしていること

入賞作品の読み聞かせを通して、子どもは、吟味された言葉に触れ、言葉で物語ることの楽しさやすばらしさを知るでしょう。その体験は、子どもの見方・考え方に影響し、言葉の力を信じる心を育て、やがて、自分自身を物語る言葉の力を獲得していくことにつながっていくと思います。

今後も多くの方が、本事業に応募してくださることを願っております。

入賞作品の選評

〈第一部〉

特　選　「なないろキュウリのひみつ」　　**あいば　みか**

○　子どもたちの想像力を育み、読む楽しさを味わえるような作品となっています。

○　小学二年生みんなで楽しみに育てたキュウリ。ゆうたはキュウリが大の苦手です。でもおいしく食べられるようにと、先生が作ったスペシャルソースに歌、ダンスのおかげで楽しい気分になり、あっという間にキュウリ1本、食べてしまいました。

　嫌いな食べ物にたいするゆうたの気持ちに子どもたちは共感しつつ、読み進めることでしょう。クラスみんな歌のとおり、頭にお皿がのった「カッパ」になり、川で泳ぐと本物のカッパの小学校にいってしまうという展開も、テンポよい文章で読者を楽しませながら、違和感なく不思議な世界に引きこみます。

○　「食べ物」の話題は、低学年の子どもたちが好むものの一つです。カッパの子どもが栽培するキュウリは、ピンクや赤など七色あり、それぞれお菓子のような甘い味がして不思議な力もあるというのですから、子どもたちの興味を一層かりたてます。

○　カッパの女の子リバとゆうたの友情は、この物語の要となる大切な場面。二人の出会いと仲良くなっていく様子も微笑ましく描いています。リバがブランコに憧れた気持ちをもう少し丁寧に描くと、最後の、人間になりたいと願ったリバの心情が、もっと読者の心に響いてくるのではないでしょうか。

○　みんなで楽しく過ごしていると一転、なないろキュウリの力のせいで本物のカッパになってしまう危機が迫っていることがわかります。クライマックスへの場面転換も鮮やかで、みんなカッパにならず人間にもどれるのか、子どもたちはハラハラドキドキしながら読むことでしょう。ゆうたとリバの友情と活躍、二人の淡い恋心まで感じるラストと、読後感もとても爽やかです。一目見て興味がわく題名は「力」ではなく「ひみつ」とした点も工夫されています。内容の細部にわたって丁寧に、よく考慮して書いています。

○　しっかりした構成力と文章力で、読ませる力の強い作品です。空想の世界を広げた子どもたちはきっと、読後、普段、食べているキュウリも違ったものに見えてくることでしょう。野菜を育てること、食べることへ楽しさを感じる、食育にもつながるテーマも含んだ作品となっています。

入選　「イタイのイタイのたべちゃうぞ」　　**鷲尾　千恵**

○　構成力に優れており、登場人物の豊かな表情や臨場感あふれる会話が丁寧に描かれているため、低年齢の子どもたちも想像しやすい作品となっている。

○　元気いっぱいの主人公のレン君や「イタイイタイ虫」を表情豊かに食べてくれるじいじ、優しいお母さん、頼もしいお姉ちゃんの様子が豊富な会話表現から人物像を明確にしている。また、それぞれの人物の言動から家族の絆も伝わってくるので、読んだ後は温かな気持ちを残してくれる。

○　最後、レン君がじいじのイタイイタイ虫を食べる場面は、これまで泣き虫だった主人公の成長を感じるところでもあり、読み手も共感しながら読み進めることができる。

○　文末表現については、「いる」と「いた」とのバランスが気になる場面があった。話の切り替えやリズム感を意識した文末表現を工夫してはみてはどうかと感じた。

入選　「だましたぬきの親切ごっこ」　　**さいだ・としひろ**

○　親切な行いをしたとき、相手が喜んでくれるのはもちろんのこと、何より自分自身の心が温かく、幸せな気分になります。そんな心の育成に大切なメッセージを、ユーモアとともに楽しく描いた作品です。

○　人間をだませなくなったとがっかりしているたぬきに、まずは信じさせることと「親切ごっこ」を提案する天狗の存在が、作品のスパイスとしてきいています。「だましたぬき」ではなく「だましぬき」だと、子どもたちがたぬきと一緒に、はっと気づいたときに、この作品の面白さが伝わるでしょう。
ラストは天狗の笑い声が聞こえてくるような明るい余韻が残ります。

○　主人公・たぬきの描き方に甘さを感じます。村人をだまして喜んでいたのは、実はさびしくて遊んでほしかったから、と中盤に突然、言葉で説明されるだけ。それでは村の人たちをだます背景にあった、たぬきのさびしさが伝わってきません。たぬきのキャラクターをしっかり描くことで、人をだますことに喜びを感じるいやなたぬきではなく、心根はやさしいたぬきとだと、子どもたちは共感し応援しながら読むことができるはずです。与七どんの家のことを元々心配していたなど、何かエピソードが描かれていると、崖崩れを心から心配し、必死に助けようとするたぬきの行動にも説得力が加わるのではと思います。

○　鼻をつまむ合図でたぬきにだまされないようにするという村人たちのアイデアですが、読んでいて少しわかりにくいと感じました。何か一工夫ほしいところです。文末に「～します」と出てくるところがありますが、適切かどうかも今一度、見直してもらいたいと思います。

《第二部》

特選　「手紙の好きなおばあさん」

末永　志穂

○　一文字一文字心を込めて自分で書いた文章には、その人の個性や思いがよく表れる。デジタル化が進み、Eメールやライン、SNS等を使ったコミュニケーションが多くなり、手紙やハガキを書くことが少なくなってきた現在であるが、手書きの文字や文章のよさを感じさせてくれる作品である。

○　強い雨がやみ、透き通るような青空が広がり、その青空にかかる虹。二年前におじいさんを亡くし一人暮らしに寂しさを感じていたが、前向きに生きていこうとするおばあさん。美しい情景描写は、おばあさんの心情の象徴であり、希望に満ちた晴れやかな場面になっている。

○　夢から覚めたときに握りしめていたおじいさんからのラブレター。そこから始まる回想シーンが詳細に綴られていて、おじいさんの優しさや人柄に惹かれるおばあさんの心情、手紙で思いを届ける楽しさや嬉しさが伝わってきて、心温まる作品となっている。

○　ファンタジーの世界が夢の中で展開される例は多くあるが、自分が書いた多くの手紙でできた紙飛行機に乗りおじいさんと再会するという発想がユニークで面白い。

○　「文字だけじゃなくて、気持ちを伝える方法はたくさんあるものね」というおばあさんの言葉から、他者とのコミュニケーションの重要性も考えることができる。

入選「ヘアゴムの魔法」　　**外薗　淳**

○　多くの小学生が、日常生活の中で、あと一歩勇気が出せたらよかったのにという経験をもっている。ハヤに勇気をもたせるために一芝居打ったサンドラとネロ。サンドラのために薬を買いに行くハヤ。登場人物の出会いや触れ合いを通して、悩みながらも成長していくハヤに自分を重ねながら読み進めることができる作品である。

○　「ブルー・ガンコ・バーサマ」と呼ばれる無口だが優しい魔女のサンドラやその使い魔であるおしゃべりなネコのネロ、物語が大好きな小学四年生のハヤ。個性豊かな登場人物がそれぞれ魅力的に表現されていることが、本作品の面白さにつながっている。

○　大きな傘の場面で張られた、魔法は「重ねがけ」することができないという伏線を、最後の場面で、ハヤには「ときもどりの魔法」をかけられていたため、結わえると勇気がわいてくる魔法具「勇気のポニー」には魔法がかけられていないということで見事に回収している。

○　実際にはヘアゴムに魔法はかけられていなかった。では、あえて「ヘアゴムのまほう」というタイトルにしたのはなぜか。筆者のタイトルへの思いをも考えることができる。

○　サンドラのために薬を買いに行く場面では、なぜ森の魔法具屋等に詳しいネロが行かないのかという疑問が残った。ネロが行けない理由等の記述があると、物語が更にすんなりと読み進められると感じた。

入選　「さるいわ」　　**千雲　さや**

○　情景描写が巧みで高い表現力を有している。また、短い文で畳みかけるように表現されており、臨場感溢れる作品となっている。

○　昔語りから始まり、作品世界に移入し、想像しながら読み進めていくことができるような構成となっている。創作

であるが、まるで実話であるかのような作品となっている。
○　主人公（弥助）と猿（大助）との交流を中心に話が展開されており、動物記のような深い愛情を受けた猿が、まるで恩返しをするかのような展開となっている。
○　クライマックスは、自然の大きな力を感じさせ、動としての壮大な力が迫るものとなっており、人知を超える形の終末の構成となっているが、もう一歩豊かな想像をかき立てるような創作をすることで、さらに新たな作品となる可能性があるのではないかと感じる。
○　主人公（弥助）と猿（大助）との交流の場面をもっと表現し、より深い愛情で結ばれた関係を構築することができたということを創作することによって、対象学年の子どもたちの心をなお一層豊かにすることができるのではないだろうか。

入選「ユキメガネ」　　**岬　とうこ**

○　従来の作品にない予想を超えた創作になっており、話の展開に読み手が引き込まれていくような作品構成になっている。また、人物の会話が巧みに表され、登場人物が豊かに描かれている。
○　作者の創作の意図が明確に主題化されており、読後は晴れやかな気持ちとなり、主人公に自然とエールを送りたくなるような作品である。
○　日本古来の原風景や自然描写から、登場人物の世界観を豊かに表現しており、対象学年の子どもたちにとって豊かに想像できるような作品となっている。
○　展開がスピーディである反面、なかなか想像が追いついていかない場面もあり、内容を少し精選した構成にするとゆっくりとした想像ができるのではないかと考える。
○　会話文の中に、疑問符や感嘆符、疑問感嘆符が多用されているが、表記がなくても会話本来の文字情報から、その時々の状況を推察することができる。読み手にどのように想像させるか一任することで良いのではないかと考える。
○　地蔵、宿屋、若い衆、地酒などと、現代の携帯電話が混在しているので、場面の世界観の統一化を図ることも必要なことではないかと提言したい。

「第45回　子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項

子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集いたします。

1　応募資格　高校生以上（１６歳以上）の方でアマチュアに限る

2　作品の種類　創作童話、体験談、地方に伝わる民話に題材を得た作品などの「子どもたちに聞かせたい話」

3　応募規定

☆　第１部　　保育園児、幼稚園児、小学校低学年向けの作品
　　４００字詰め原稿用紙（縦書き）　１０枚～１５枚

☆　第２部　　小学校中、高学年向けの作品
　　４００字詰め原稿用紙（縦書き）　１５枚～２０枚

☆　表紙は枚数に含めません。各ページにページ数を記入してください。

☆　原稿はＡ４判の４００字詰め原稿用紙を使用し、右肩をとじてください。(ワープロ原稿も可)

☆　作品は自作未発表でほかの童話賞等へ応募中の作品でないものに限ります。（公募で入賞した作品等の内容を加筆、訂正した場合も応募できません。）

☆　応募は、各部につき一人一作品に限ります。文体は自由です。

☆　表紙に、第１部・第２部の別、作品の題名、住所（郵便番号も記入）、氏名（ペンネームの場合は本名も書き添えること）、性別、年齢、職業（学校名）、電話番号、お持ちの方はメールアドレスを記入してください。

☆　人名、地名等の固有名詞には読み仮名をつけてください。

☆　民話、伝説等を題材とした場合は、その出典を明示してください。

☆　応募作品は返却いたしません。

☆　応募作品の著作権は応募者に帰属。主催者は入賞作品を冊子にまとめる権利を有します。

☆　作品選考に関するお問い合わせには一切応じられません。

4　応募の締切　令和５年９月１１日（月）　消印有効

5　選考委員　(50音順・敬称略)

有村　恵　　（鹿児島市小学校国語部会会長　鹿児島市立吉田小学校長）
内村　英人　（鹿児島県小学校教育研究会国語部会会長　鹿児島市立喜入小学校長）
勝本　祥治　（鹿児島市学校図書館協議会会長　鹿児島市立生見小学校長）
久保田　里花（児童文学作家　椋鳩十研究家）
小山　陽子　（鹿児島市立図書館図書係主幹兼図書係長）

6　入選者発表　令和５年11月下旬頃
かごしま近代文学館かごしまメルヘン館ホームページ上にて発表します。
結果通知は、入選者のみとさせていただきます。

7　表彰式　令和６年２月25日（日）

8　賞　☆　特選（各部１編）…賞状及び楯、賞金５万円
☆　入選（各部３編）…賞状及び楯、賞金３万円
☆　佳作（各部数編）…賞状

9　主催　鹿児島市、鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団

応募状況

■応募総数

第１部	70 点
第２部	71 点
総　数	141 点

■年齢別応募状況

部門別	第１部	第２部	合計
16 ～ 19 歳	2	0	2
20 ～ 29 歳	3	1	4
30 ～ 39 歳	5	9	14
40 ～ 49 歳	14	11	25
50 ～ 59 歳	13	9	22
60 ～ 69 歳	19	25	44
70 ～ 79 歳	13	12	25
80 ～ 89 歳	1	1	2
90 歳～	0	0	0
不明	0	3	3
合計	70	71	141

■都道府県別応募状況

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数
北海道	3	東京都	22	滋賀県	0	香川県	1
青森県	0	神奈川県	6	京都府	3	愛媛県	0
岩手県	2	新潟県	1	大阪府	13	高知県	1
宮城県	1	富山県	0	兵庫県	7	福岡県	5
秋田県	1	石川県	1	奈良県	1	佐賀県	0
山形県	0	福井県	1	和歌山県	0	長崎県	4
福島県	0	山梨県	0	鳥取県	0	熊本県	1
茨城県	4	長野県	3	島根県	0	大分県	0
栃木県	0	岐阜県	7	岡山県	1	宮崎県	2
群馬県	1	静岡県	1	広島県	2	鹿児島県	21
埼玉県	5	愛知県	1	山口県	5	沖縄県	1
千葉県	11	三重県	1	徳島県	1	その他	0

選考委員

（五十音順）

有村　恵　氏（鹿児島市小学校国語部会会長　鹿児島市立吉田小学校）
内村英人　氏（鹿児島県小学校教育研究会国語部会会長　鹿児島市立喜入小学校）
勝本祥治　氏（鹿児島市小学校図書館協議会会長　鹿児島市立生見小学校）
久保田里花　氏（児童文学作家　椋鳩十研究家）
小山陽子　氏（鹿児島市立図書館図書係主幹兼図書係長）

表紙絵・さし絵

（五十音順）

上村比登美　氏
黒木奈央　氏
中間有紀　氏
桝本容好　氏（鹿児島市芸術文化協会会員）

「子どもたちに聞かせたい創作童話」
第４５集

発　行　令和６年２月
編集者　鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団
鹿児島市城山町５番１号
TEL（099）226−7771
印刷所　㈱あすなろ印刷
鹿児島市城西2-2-36-205
TEL（099）214−3757